

逢坂峠越磯部道あれこれ（2）
(民族的に見た峠道と峠のバーチャン)

平成23年1月作成

大 屋 行 正

逢坂峠神話伝承と旧蹟マップ



およし茶屋跡 岩崎よし（私の大叔母）が最後まで守った峠茶屋。 39, 48 ページ参照。

逢坂峠 天照大神が猿田彦命に先導されて逢坂峠に降臨した。6 ページ参照。

高天原 地上の国つ神を支配する天つ神の棲む神聖な場所。天照大神は猿田彦命の先導で高天原よりこの地に降臨された。8 ページ参照。

猿田彦の森 伊雑浦に上陸された天照大神が伊勢に向かう途中先導した猿田彦命が邪魔になる枝を切払った。片枝の杉ともいう。5 ページ参照。

風穴 伊奘諾尊が伊奘冉尊を求めて「黄泉の国」へ行った時の出入口。16 ページ参照。

御池 「黄泉の国」から帰った伊奘諾尊が禊を行い天照大神が生誕したという伝承がある。17 ページ参照。

榎の木原 天狗の伝承がある。36 ページ参照。

天の岩戸 岩戸に隠れた天照大神を迎神儀式（宮中儀式の起源）により迎え出した。古くは瀧祭窟と言い水源を祀った。12 ページ参照。

家立茶屋 猿田彦命この地を開き家を立て始めた。中には分福茶釜を据えた。20, 21 ページ参照。

逢坂峠越磯部道あれこれ（２）

（民族的に見た峠道と峠のバーチャン）

まえがき

いよいよこの学習を始める動機となった本編の主人公である私の大叔母「峠のバーチャン」の登場である。幼い時の印象ではほっそりとした色白の清楚な老美人であった。何故か70年を経た今もその印象が消えない不思議な存在の女性であることは前編で示したとおりである

本シリーズ「勢田川調小留書」については毎回冒頭に記しているが、私が数年来続けてきた故郷学習のレポートである。思いつくままに学習した結果を纏めたものである。書くことによって学習の内容を整理し、読み返し検証し、必要に応じて先学の諸先生の指導を頂き、学習の不備を指摘していただき正しく学習をするためのものでもある。

今回この学習を始めて驚いたことは、素晴らしい先学者であった中村精式氏を知ったことである。勿論お会いしたことはなく遺された著書での出会いである。今回も先ず冒頭にこの『勢田川調小留書』の目的を記して置きたい。

今回、中村精式氏の『伊勢志摩逢坂越え覚書』を拝読し、その識見に敬意を現すと同時に、逢坂峠・磯部道（古道）伊勢道（旧道）について深い愛情をもって研究された先学者が居られたことに、前稿に引き続き感動の意を強くした。大叔母についてその著書の中で私の知らなかった多くのことが詳しく紹介されているのを見て、私の記憶の幼さに新たな息吹を与えて頂いた。中村氏の見解と若干異なる点も含めて、私の「老女岩崎よし観」を書き留めたいと思い立った。

前稿は地勢的に逢坂峠を考えたが、本項は磯部の人々の営みを中心とした民俗的に考えることにした。学習して非常に驚いたことは、この峠道に意外に多くの神話を連想する地名や遺跡（遺跡としての扱いはされていないが）のある事である。平地に住む磯部・恵利原の人々が比較的急峻な逢坂峠を聖地として信仰にも似た畏敬の念から生まれた伝承でないかと思う。今はこの伝承は人々の口には上らなくなってしまったことを思い、少し日本神話に拘った感がある。

本稿は峠の機能を失って久しく既に人々から忘れ去られているこの街道の峠越えの茶屋を最期までを守りぬいたといわれている「峠のバーチャン」に捧げる。

神話と伝承の峠道

先史時代の磯部町の遺跡（『磯部町史』から）

先ず、古い古代を偲ばせる伝承・伝説の舞台となるこの地において、古代の人々がどのような営みを繰り広げたかを知ることから始めなければならない。

その為『磯部町史』に遺跡について詳しく述べられているのでそれを参考にして考察

する。

・旧石器時代 (35,000～10,000 年前)

この遺跡群は神路川、池田川、地藏川、野川流域の標高30m前後の丘陵・台地の縁端部附近で低地を臨む位置に存在し、動物群の動きを監視しながら移動生活をしたと思われる小規模のキャンプ遺跡が発見されている。

この時代は大氷河時代で、海水面が100 (『磯部町史』では80～140) m位現在より低かった。従って現在の伊雑湾は町内を流れる神路川、池田川、地藏川、野川などが運ぶ土砂によって谷底平野を形成し、湿地帯となって動物達の格好の水呑み場であったと思われる。当時築かれた遺跡群は大型獣の狩場であるこの湿地帯を見下ろす台地の縁端部に、狩猟の拠点を置き動物群の監視をしていたと思われる。

当時の遺跡は狩猟の拠点基地即ち獲物の解体遺跡、石器製作場遺跡等はあるが定住住居跡の出土例は少ない。これは大型獣から身を隠して洞穴・岩陰を住みかとして、一定の生活領域内を移動しながら狩猟生活をしていたことを意味する。大陸と陸続きであった日本列島に大型獣を追って住み着いた旧石器人が主役であった。

何故、水呑み場が大型獣の狩場であったのか。狩の道具が未発達な当時、人は大型獣の群れに近づくことが出来なかった。その為なんらかの理由で群れを離れ一頭だけになった大型獣を狙い、水辺に誘い込む。水辺の沼地では身動きがとりにくく、特に体重の重い大型獣はぬかるみには弱く動きが取れなくなったところを、ナイフ型石器(細石刀)などで射止めていたと言われている。

参考資料 磯部町史 磯部町史編纂委員会

日本人はるかな旅 (1) NHK スペシャル日本人プロジェクト編 NHK 出版

・縄文時代 (12,000～2300 年前)

遺跡は前時代とほぼ同じ川の流域の平坦地にあるが、数は格段に増えている。この時期の特徴は氷河期が終わり徐々に温暖化が始まり、縄文海進といわれる海水面の上昇が起り、ほぼ現在と同じ位置に海岸線が移動して来た。遙か遠くにあった海岸線が身近に迫り、かつての大型獣の狩り場であった湿地帯が海化した。更に気候による植生の変化が起き草原が失われ大型獣は餌場を失い絶滅したといわれている。

代わって狩の対象となったのは動きの敏捷な中・小型動物となったため、遺跡からの出土品も弓矢の使用を物語る石鏃が多くなる。

大型獣の絶滅により危険がなくなったこと、植生の変化により木の種子が食用になるなど生活環境の変化によって定住化が進んだ。その為種子の保存、調理のため土器や叩石・磨石などが出土している。

磨製石斧は木材加工技術が興り、堅穴式住居や掘立住居の始まりを意味する。然し『磯部町史』では住居跡を示す遺跡の存在についての記述はない。東北地方の三内丸山遺跡では高度の木工加工技術の存在を示している。

北からのマンモスハンター (旧石器人) に続いて、今から 6000 年前頃に西から漁労文化 (潜水漁法) と稲作技術を携えて移住して来た人達がいた。当時の稲作は熱帯ジャボニカで焼畑又は天水田栽培であった。丁度縄文海進の真っ只中で海水面が現在より約4

～5m高くなり比較的高地で栽培されていた。

狩猟を主体とする旧石器人に対して新しい文化を獲得した人達の渡来である。自然に挑戦し我国独自の文化が芽生えたのは縄文時代に遡るといえる。縄文人の誕生である。

今に伝わる古代の伝承はこの時代の先住民と渡来人の出会いと融合の記憶を語り継いだものかもしれない。

参考資料 磯部町史 磯部町史編纂委員会

竪穴住居を考える 大屋行正

縄文時代 Wikipedia

・弥生時代（紀元前3世紀～3世紀）

『磯部町史』によるとこの時代の遺跡は縄文時代と比較すると激減し、標高1～2mの伊雑湾沿岸部に7ヵ所、磯部川、野川流域の沖積低地を臨む標高約10mの高台に立地する遺跡6ヵ所が記されている。

低地沿岸部の遺跡は縄文時代を引き継いだ狩猟・漁業を主とする弥生前期の集落であり、磯部川、野川流域の台地の遺跡は本格的な水稻耕作が開始された弥生後期に形成された、水稻技術を持った弥生の渡来民の集落であろうか。

前時代と弥生時代の画期は、農業特に水稻農耕の普及により穀物の余剰が生じその蓄積が進み様々な変革が起こったといわれている。穀物の余剰は、貯蔵用の土器や竪穴住居による定住が進み、余剰穀物の貯蔵用の倉庫（掘立柱建築）や貯蔵穴が出現する。

更により多くの収量を得るために水田の開墾や用水の管理などに大規模な労働力が必要とされるようになり、集団（集落）の大型化が進行した。富や耕作地、水利権などを巡って集団間の争いが生じた。生活の糧であった穀物が「富」と「権力」に転化され人々の間に貧富の差や支配被支配の関係や紛争が生まれた。

この時代の後期には大陸から青銅器、鉄器が伝来したと言われているが、当地では須恵器、土師器とともに古墳時代6世紀後葉の古墳から副葬品として出土されているという。

この時代のもう一つ特筆されるべきことは、我国最古の歴史書としての『日本書紀』・『古事記』や大陸の史書により倭（大和）というクニの濫觴の記録が残されている事である。畿内を中心とした日本列島の古くからの伝承（神話）が文字の伝来により古くから口伝されてきた伝承や記録をもとにして西暦700年代に撰修されたという。『日本書紀』の「一書に曰く」という注釈を見ても、いかに関連した多くの伝承が古代において存在したかが伺える。そしてそれと類似の伝承が我らの逢坂峠にも存在している。

『磯部町史』に記される旧石器時代から弥生時代にかけての遺跡からも、窺い知れる様にアジア各地から渡来して生まれた縄文人と更に優れた文化を持った新しい渡来人の棲み分け（争いと融合）がこの地においても繰り返されていたことが想像できる。この地に残る伝承がそれを示しているように思う。

参考資料 磯部町史 磯部町史編纂委員会

縄文時代 Wikipedia

伝承は何かを訴える

その昔、この山地を駆け巡ったであろう縄文人の狩猟（鳥獣・溪流魚）や木の実・山菜の収集によって出来た小道が、この峠越え古道の発祥だということは前項の遺跡の発掘状況から見て間違いのないであろう。

「合坂」や「天の岩戸」といい「家立茶屋」その他に関わる神話伝説や伝承から縄文時代或いはそれ以前の狩猟のキャンプ地であったと思われる。溪流があり、湧き出る泉があり、更にまた地図で見ると峠から磯部側は標高100m前後の比較的なだらかな南下がりの斜面に広大な沼地が続くなど、狩猟という原始的な生活を営むには絶好の立地条件を備えていると思える。

峠から標高300m前後の勢志国境の急峻な尾根を挟んではいるが、約2km西方には大床谷（おおいすたに）遺跡（旧名：朝日谷遺跡）がある。伊勢市立郷土資料館発行の『伊勢を掘る』によると、この遺跡は旧石器～縄文時代にかけての遺跡である。出土遺物は縄文早期後半～晩期にいたる土器類・石器類である。五十鈴川上流域のこの地には同年代と思われる深戸遺跡、田代口遺跡などがあり、五十鈴川上流域には縄文人が定着していたことを物語っている。又、『磯辺町史』にも峠からの緩斜面にも幾つかの旧石器時代以降の古代人の生活の跡を示す遺跡が存在することが記されている。この地域の数々の神話伝説の中に家立茶屋について『伊勢参宮名所図会』には「猿田彦大神この地を開き家をたて始め給ひしゆえに家立の茶屋といふ云云。然れども慥成（なる）書、見る事なし」とある。所謂口伝である。我国の木造建築の始まりも縄文時代と云われている。当時の木材加工技術は相当な進歩を始めており、竪穴住居や高床式住居が始まったのもこの時代であったという。大形獣が姿を消した後、人々は陰湿な岩窟等の地中から、快適な地上で居住するようになったことを窺わせる。

家立茶屋跡は残念ながらその遺構・遺物が発掘されていないため、茶屋以前の様子は伺い知れない。ロマンを求めるのは泡沫の夢というべきであろうか。大床谷遺跡は平成元（1989）年に精密機器試験場建設予定で試掘調査の際、発見されたという。開発は自然を破壊するというデメリットが大きい反面、遠い古代人類の営みの跡である遺構や遺物を発掘するというメリットもある。

錦仁氏は地域に生きる伝説には「村人の語り伝える口頭伝承にこそ文献には記されない村人（常民）の本当の心、民俗固有の心意が潜んでいる。伝説は村人の生活の中から自然に発生したもので、長い歴史を通じて村人が語り継いできた。遠い古代の歴史が今も尚語り継がれている。伝説は姿を変えた史実だ。村人は事情があつて史実をそのままに語り伝えることが出来なかったから、伝説という形で語り伝えた（ものもある）。村人は体験した古代の真実を語り継いで来た。伝説は史実とは言えないが、その中に古代の面影が秘められている。」と記している。

シリーズ「8月15日」産経新聞（2008-14日）で長谷川三千子女史は「本来、神話とは、人の心の底にひそむ無形の想いが凝縮し、形をなしてうかび出てきた重要な文化遺産であり、それぞれの民族にとっての大切な宝である。伝承は過去の世界を正しく伝えるのではなく、それらが語られた時代の人々が、世界がどうして現在の姿になったかを、現実世界に生きた人間や時間を超越して考え出した説明である」と言っている。

私は磯部（恵利原）地区の古い時代の人々は、誇るべき郷土の古代人について、何を

後世に伝えたかったのかその心を探ってみたい。

参考資料 伊勢を掘る 伊勢市立郷土資料館

小町伝説はこうして作られた 錦仁 第13回春日井シンポジウム (2005 年)

シリーズ「8月15日」 長谷川三千子 産経新聞 平成20年8月15日

私の峠道神話・伝承物語

峠道に関わる開発者としての猿田彦命の伝承

神話の宝庫ともいわれる峠道に登場する伝説の場所を北から順次訪ねてみる。史実を忠実に記そうという気はない。どのみち超古代の伝承を古い時代の恵利原人の心になって、あれこれ想像するだけのことである。

1. 逢坂峠・片枝の杉

村の古い伝承に「伊雑浦に上陸された天照大神が伊勢に向われるとき、これを先導した猿田彦が、道中の邪魔になる枝を伐り払った」のだという。これが「片枝の杉」の伝承である。中村精武氏は「この地方では風の激しい秋冬の候の卓越風は北西である。ことに逢坂山系の鞍部を越える峠おろしは強く厳しい。峠おろしに敢えてさからわなかったということかも知れない」と述べておられる。然し、私はこの伝承の中にも何か夢のような物語が隠されているのではないかと思う。単なる天然現象として片付けてしまうには伝承が嘆くと私は思う。

天孫降臨に猿田彦命が登場するのは『日本書紀』では、正文に次ぐ「一書第一」と『古事記』である。『日本書紀』の「一書第一」では、天八達之衢（あまのやちまた）で皇孫をお待ちしていた猿田彦大神という異様な風貌の巨神（この風貌については天狗の項で記す）の道案内で、皇孫は日向の高千穂の櫛舂峰（くしふるのたけ）に威風堂々とよい道を選び分け選り分けて降臨した。この時、有名な猿田彦命（『古事記』では猿田毘古神と表記）と天鈿女命（『古事記』では天宇受売神と表記）との出会いがあった。そしてその大任を果たした猿田彦大神は天鈿女命に送られて五十鈴川の上流に到着したというのがそのあらましである。誰もが知る有名な話である。

ところで、猿田彦命と天照大神とは何らかの接点があったのか。なければこの話は成り立たない。

『古事記』にその接点を窺わせる物語が記されている。即ち、

「……日子番能瀬々芸命（ひこほのににぎのみこと）の天降らむとする時に、天の八衢に居て、上は高天原を光し（てらし）、下は葦原中国を光す神、是に有り。故爾（しか）くして、天照大神・高木神の命以て、天宇受売神に詔ひしく、「汝は手弱女人（たわやめ）に有れども、いむかふ神と面勝つ神ぞ。故専ら汝往きて問はまきは、[吾が御子の天降らむと為す道に、誰ぞ如此して居る]ととへ」とのりたまひき。故、問ひ賜ひし時に、答へて白ししく「僕は、国つ神、名は猿田毘古神ぞ。出で居る所以は、天つ神御子天降り坐す聞きつるが故に、御前に仕へ奉らむとして、参み向へて侍り」とまをしき。爾くして……

天降しき

ということで、高天原に居ます天照大神と天の八衢に居ます猿田彦神とは直接ではないが、天鈿女命を介して天の八衢にいる目的と自らの素性を明かすなど間接的ではあるが接点があったことになる。そして猿田彦命は天照大神の信任を得て、その結果天降りが決行されることになった。

一方、『日本書紀』(小学館)の皇孫降臨の「一書第一」には次の様に記されている。

(猿田彦命) 対へて曰く『天神の子は、筑紫の日向の高千穂の穂触峰に到りますべし。吾は伊勢の狭長田の五十鈴の川上に到るべし』といふ

『日本書紀』(小学館本)の編集者(原著の編者にあらず)はこの「五十鈴の川上」の頭注に次のように述べている。「……今の伊勢神宮の内宮は五十鈴川の川上にある。これは天照大神を鎮座地まで猿田彦命が案内することの予言となる。伊勢神宮鎮座の縁起は垂仁紀25年条にみえるが、猿田彦大神とは関係なく語られている。……」。何か猿田彦大神と天照大神そして天鈿女命と伊勢の地との関連を窺わせている(このことについては後記する)。

この項の冒頭に記した「伊雑浦に上陸された天照大神が伊勢に向われるとき、これを先導した猿田彦命が、道中の邪魔になる枝を伐り払った」ということが、天孫降臨の異説として古い昔の里の伝承としてあったことを示唆しているように思う。

つまり、恵利原地区には天照大神が逢坂峠に降臨(皇孫ではなく皇祖神の降臨)し、この地区の地祖神である猿田彦命に先導され五十鈴川の川上に安置されたという伝承があったと考えられる。

猿田彦命の神に就いてはこの後、章を改めて学習する。

参考資料 伊勢志摩逢坂峠越覚書 中村精式 志摩郷土会

日本書紀 1 新編日本古典文学全集 巻第一神代[上]～巻第十応神天皇 小学館

古事記 新編日本古典文学全集 小学館

2. 高天原

詳しい話は専門書に譲るとして、高天原という世界観は『古事記』によって明確に述べられているが、『日本書紀』にはこの概念はない。従って高天原という伝承は『日本書紀』ではなく『古事記』の世界観の影響を受けていることになる。

『古事記』における高天原には多くの「天つ神」が出現し、その命を受けて伊耶那岐命・伊耶那美命が降り大八州を作る。つまり『古事記』は高天原の神の命(意思)により「国つ神」の住む地上の世界を創出し、地上に対して高天原を神懸かりの優越した世界として語っている。これに対して『日本書紀』の国生みは伊奘諾尊・伊奘冉尊は誰の指令にもよらず、二神が共にはかつて天地にわたる世界秩序を生成したと語っている。

また、天孫降臨の物語も『古事記』では降臨の司令神としての皇祖神(天照大神)が地上の統治の神勅を授けその役割を果たしているが、『日本書紀』の正文は指令神は高御産巢日神(たかみむすひのかみ)で、天照大神は地上統治に対する役割を持たない「日の神」として語られている。ただし「一書第一」では『古事記』と同趣旨の記述があるが本書

ではなく異伝の一つとして語られている。

高天原は『古事記』編纂上の世界観であり、地上（葦原中国）の国つ神を支配する皇祖神を含む神々（天つ神）の住む神聖な場所なのである。

『古事記』において神々の住む高天原には最初に天の中心にあつて天を主宰する神「天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）」が存在し続いて「高御産巢日神」、「宇摩志阿斯訶備比古遲神（うましあしかびひこぢのかみ）」そして五柱の別天つ神（こたあまつかみ 天地の始まりから天地の世界全ての源となる存在の神）最後の「天之常立神（あめのとこたちのかみ）」へと続く。その後の国之常立神（くにのとこたちのかみ）から伊耶那岐神・伊耶那美神までを神代七代といい、これらの諸神の命を以て伊耶那岐神・伊耶那美神によって国生み・神生みが始められる。神名から見て高御産巢日神の影響が大きかったと思われる。

出雲の国譲りを成功させて葦原中国の国作りが完成すると、高御産巢日神の名称が高木神と改められ、高天原の主役は天照大神に交替し天孫降臨を主宰することになる。皇祖神天照大神と高木神は三種の神器と瑞穂の国統治の神勅を邇邇芸命に授け天降ることを指示する。これによって大和朝廷による瑞穂の国統治の正当性が保障された。

『日本書紀』の「一書第一」で『古事記』と同様のことが語られている。

『記紀』の高天原神話の構成は

1. 神世7代—天地の創始
2. 八州起源—イザナギ・イザナミ 2 神の国生み
3. 諸神の出生
4. 瑞珠盟約—アマテラスとスサノオとのウケイ（盟約）
5. 宝鏡開始—天の岩戸がくれ
6. 宝剣出現—スサノオのオロチ退治、および大国主命の物語
7. 天孫降臨—出雲の国譲り、およびホノニギの天下り
8. 海宮遊幸—ヒコホホデミのワダツミ行き

（神々の名称をカナ書きにしたのは『記紀』の表現が異なるため）

となっていることはよく知られている通りである。

『記紀』がよりどころとした古伝が既に存在していたと推定される。そしてそれぞれの風土に合わせたその地方独特の物語・伝承があったことも想像できる。

我が恵利原の高天原伝承の名残は上記の傍線を付けた天の岩戸と、天孫降臨異伝である天照大神の降臨と猿田彦命の出会いである。

三品彰英氏は日本神話論の中で、神代史の最初の形が出来上がったのは西暦6世紀の中葉、欽明朝前後という。『記紀』編纂の100年あまり遡った頃と推定している。又、神代史（神話）の体系は幾代かの神々が時代を追って次々に現れ、それぞれその都度若干の異なる神話を展開し、その前後の神話へと繋がり人皇第一代（神武天皇）へと続いていると述べている。

詳しいことは専門書に譲るとして、天孫降臨については『日本書紀』の「一書曰」が示すように異伝が多い。異伝が多いということは、伝承に長い期間を経て来た事を示唆している。特に天孫・裔孫が瑞穂の国を統治すべきであるという神勅は、天皇権の絶対性の確立理念とした推古朝以後、とくに大化改新による新政権の成立の時代の思想にもとづくもので、なかんずく『日本書紀』の「一書第一」の天壤無窮の宣言に至っては最も新しく、『日本書紀』・『古事記』撰述当時の潤色であろうと言われている。「三種の神

器」の授与、随伴する神々の多さなどを考えあわせると政治的色彩が強く感じさせられる(三品氏)。特に随伴神が『記紀』の間で大きく相違していることは、それを伝えた氏々が氏に伝わる伝承を語っているためであり、氏々の盛衰を物語るものとして重要である。

我が恵利原の高天原伝承は天照大神・猿田彦命・天鈿女命の神々が揃う事からみて最も新しい伝承の一つと見ていいと思う。天照大神の降臨と猿田彦命の出会いについては既に逢坂峠・片枝の杉の項に記した通りである。

この高天原を地上の何処かに比定とする考え方は古くからあった。代表的なものは次のようなものである(ウェブ検索)。

1. 奈良県御所市高天 このエリアを含む葛城地方は大和朝廷以前の古代に葛城王朝といわれる強大な勢力を誇った葛城氏の本拠地であった。

神高皇産霊尊を祖神とする葛城氏は、武内宿禰を元祖とする奈良盆地西南部(葛城郡)に古くから土着していた豪族である。

3世紀末から4世紀にかけ長期間にわたって奈良盆地東南部(三輪山麓)にある「大王家」から独立する体制を築いてきた(葛城王朝説)。少なくとも5世紀前半の間、大和朝廷は、「大王家」と葛城氏との連合政権ではないかと思われるほど葛城氏の勢力は、強かった。

この地区には『古事記』の高天原神話の中心的な神である高御産巢日神(『日本書紀』の名称 神高皇産霊尊)を祭神とする高天彦神社がある。

2. 宮崎県高千穂町 宮崎県北部で天岩戸や天香具山、高天原、四皇子峰等がある。高千穂神社では、天鈿女命が舞ったことから始まったとされる高千穂の夜神楽が伝承されている。
3. 熊本県山都町(阿蘇・蘇陽地区)
4. 岡山県真庭市(蒜山高原)
5. 群馬県上野村(生犬穴)
6. 茨城県多賀郡

以上を参考にして我が恵利原の高天原伝説を振り返ると次の様になる。

私は強引に高天原を恵利原地区に比定する意思はない。然し上記の比定候補地に負けず劣らずの要素が存在する。中村精武氏の『伊勢志摩逢坂峠越覚書』に次の伝承が記されている。

「片枝の杉」について「伊雑浦に上陸された天照大神が伊勢に向われるとき、これを先導した猿田彦命が、道中の邪魔になる枝を伐り払った」のだという村の古い伝承がある(あった)。

この片枝の杉について、中村精武氏は「この地方では風の激しい秋冬の候の卓越風は北西である。ことに逢坂山系の鞍部を越える峠おろしは強く厳しい。峠おろしに敢えてさからわなかったということかも知れない」と述べておられることは前記した。

この伝承によれば、高天原の最高神で皇祖神である天照大神は猿田彦命の先導によって高天原より直接この地に降臨されたことになる。これは正に恵利原地区のみに残る伝承であろう。そして、その伝承を裏付けるような物語がある。即ち、『日本書紀』の「伊勢の祭祀の始まり」の項に、

時に天照大神、倭姫命に誨(おし)へて曰はく、「……。是の国に居らむと欲ふ」とのたまふ。故(か

れ)、大神の教(おしへ)の随(まにま)に、其の祠を伊勢国に立て、因りて斎宮を五十鈴川の上(へ)に興(た)てたまふ。是を磯宮と謂ふ。則ち天照大神の始めて天より降ります処なり。

との記述がある。また、『倭姫命世紀』には、

……猿田彦神の裔、宇治土公の祖の「太田命」が現はれ参上したので、……。倭姫命が「吉き宮処あるや」と問ふと、「さこくしろ宇遅の五十鈴の河上は、大日本の国の中にも殊勝なる霊地あるなり。その中に、翁三十八万歳の間にも未だ視知らざる霊地あり。照耀くこと日月の如くなり。惟ふに、小縁に在らじ、定めて主の出現御座さむとする時に、『献るべし』と思ひてここに敬い祭り申す」これにより彼の処に往き到って、御覧じれば、昔、大神が請願されて、豊葦原瑞徳国の内の伊勢のかさはや(風早)の国に美し宮処ありと見定められ、天上から投げ降ろされた天の逆太刀・逆鉾・金鈴等が、そこにあったので、甚く懷に喜ばれて、言上された。

とあり、『倭姫命世紀』では、猿田彦命の裔で宇治土公の祖である太田命が登場して昔、天照大神と所縁のある場所を案内したということである。

又、この記述に関連して、平城天皇の朝儀についての召問に対して、祭祀関係氏族の斎部広成(忌部の裔)が大同2(807)年に撰上した『古語拾遺』(朝廷の祭祀を司っていた忌部氏が天智の改新後中臣氏に押されて勢力が振るわなかったため、衰運回復を図って天地開闢から天平年間までの祖先の功業を記した歴史書)に次のような記事がある。

卷向の玉城の朝に泊(およ)びて、皇女倭姫命をして天照大神に斎き奉らしむ。仍りて、神の教の隋に、其の祠を伊勢国の五十鈴の川上に立つ。因りて、斎宮を興てて、倭姫命をして居らしむ。**始め天上に在すときに、預め幽(かく)れたる契を結びて、衢の神の先降ること、深き以(ゆえ)有り。**

『倭姫命世紀』は鎌倉時代末期(西暦11世紀後期)までに成立した伊勢神道の秘書『神道五部書』の一つである。『倭姫命世紀』の内宮鎮座紀はこの『古語拾遺』の記述に触発(度会神主が)されて語られたものであろうか。この部分についてはある作為を感じないわけではないが、大方の伝承・伝説とは大凡このようなものではないだろうか。時の権力者が自らの立場を誇示して、伝承を歪曲したり付け加えたりしたものが後世に伝えられていると思われるが、ある程度は史実を読み取ることが出来るのではないだろうか。

『倭姫命世紀』では高天原の最高神、天照大神と国つ神である猿田彦命とその裔である宇治土公を結び付けているのが特徴である。また、天照大神自身が五十鈴川上流を鎮座するに相応しい美し宮処として古くから既に見定められていたということも特徴の一つである。

殊にこのことに就いて『古語拾遺』では、天照大神と猿田彦命が既に天上において天下る地を五十鈴川の川上と決めていたと記述している。広成が宇治土公を猿田彦命の裔と認識していたかは分からないが、猿田彦命の役割を強調している。

この項の冒頭に記した「伊雑浦に上陸された天照大神が伊勢に向われるとき、これを先導した猿田彦命が、道中の邪魔になる枝を伐り払った」という伝承が、高天原という字名(小字名)の謂われであり、「磯部神話」と言ってもよいのではないだろうか。

元々伊勢神宮の創祀については明確な伝承が残されていない。『日本書紀』では大和朝廷の版図拡大の象徴として記されているが、同時代に成立したといわれる『古事記』には伊勢神宮創祀の記述がなく、崇神紀の豊鉏入日売命（とよすきいりびひめ）と垂仁紀の倭比売命の割注に「伊勢の大神宮を拝み祭りき」と記されているのみである。これだけではその創始は分からない。

前編『逢坂越磯部道あれこれ（1）』で私が想定した天照大神と猿田彦命についての記述を引用する（学術的に証明されているわけではない）。

私の推論では天照大神的人物の実在時期は2世紀中葉であり、猿田彦命的人物も同時期と思う。逢坂峠に由来するこの2神はほぼ同時期に実在したたのではないだろうか。天照大神より猿田彦大神のほうがこの地区においては先住神といえる。

新しい弥生の渡来人は昔の里人に対してまつろわぬ土着住民として、道中の邪魔になる枝にたとえて、それを鎮めた象徴として「片枝の杉」として語り継ぎ、その杉林を「猿田の森」と伝承した。偉大なる神、天照大神や猿田彦命にまつわる伝承は、何時しか消えたものの、古くから里人によって語り継がれたと思われる。

宇治の月読宮の東方に「興玉森」がある。此处は猿田彦命の舊地である。猿田彦命は五十鈴の宮地を皇大神宮に譲り奉り、その宮地からこの森に退かれた。神殿はなく鳥居一基を立てたという。猿田彦命は天照大神の御鎮座より以前からこの地の地主の神であった。猿田彦命はこの地一帯の地主神である為、神殿は不要であったという。現在はこの森の頂きに宇治山田神社が建つ。これは「宇治の山田神」と読むべきで、山田神が猿田彦命ということになる。ト部兼邦は、古くは「興玉の神」と呼ばれていたという。伊勢の猿田彦神社は新設の神社であるが、この神の本拠とされる地で、この神の神裔が奉仕する神社だから実質的には全国の猿田彦神社の総本社といえると猿田彦神社の縁起を語る。（飯田道夫氏）

逢坂山南麓の東は広い谷である。もと旧道は、この谷を覗き見ながら山腹を大回りに廻っていた。このすり鉢のような谷の西側は、アザ北ノ河内、東側をアザ泉河内という。そしてその間は杉の林であり、附近は石灰岩の採石場であった。北ノ河内の上はアザ高天原という壮大な地名を誇っている。その中腹に2町余りの榎ノ木原（かやのきはら）がある。小字名にも「高天原テンテン」。ヒューデンデンはこの森に棲む天狗の仕業。峰の辺りに残る一本の大松を、天狗松と呼んでいる。昔はこの界限は天狗の縄張りであったようだ。五ヶ所街道の西の神路山山中に「碁盤石」がある。天狗が碁を打ったところと言われている。

参考資料 伊勢志摩逢坂峠越磯書 中村精式 志摩郷土会

日本書紀 1 新編日本古典文学全集 巻第一神代[上]～巻第十応神天皇 小学館

古事記 新編日本古典文学全集 小学館

倭姫命世紀 神宮古典籍印叢刊8 神道五部書 皇学館大学出版部

日本神話論 三品彰英 岩波講座日本歴史 23 別巻2 岩波書店

サルタヒコ考 猿田彦信仰の展開 飯田道夫 臨川書店

3. 伊勢神宮

内宮で祀られる「興玉神」は御垣内西北の隅にあり、地主神としての猿田彦命を祀るとされている。社殿はなく、石畳があるだけである。この石壇は二見の「興玉神」を遥拝するために西を向いている。月並祭（6月15日と12月15日）、神嘗祭には先ずこの神に奉仕員一同により地主神として興玉神祭が行われる。

「宮比神」は「興玉神」と同様石畳に石神として、北向きに鎮座する。天鈿女神の別名とも言われている。矢張り猿田彦命と一対となっている。

滝祭宮は五十鈴川の御手洗場に向かい左手にある。社殿はないが御垣と御門があり、五十鈴川の水の神である弥都波能売神（みずはのめのかみ 此の神については天の岩戸の項で学習する）を祀り、石畳の上に石神がお祀りしてある。皇大神宮の所管社で、別宮に準じて祭典も行われている。

さて、内宮の主祭神は天照大神であり、相殿神は天手力男神と万幡豊秋津神と言われている。然し、私には少し理解できない。『古事記』によると天孫降臨に際して、天照大神が邇々芸命に宝鏡を授けた時、

「此の鏡は、専ら我が御魂と為て吾が前を拝むが如く、いつき奉れ」とのりたまひ、次に「思金神は前の事（今言ったこと……いつき奉れ）を取り持ちて（受け持つて）政を為せよ」とのりたまひき」

とある。また、『日本書紀』の天孫降臨の「一書第二」として、

この時に天照大神、手に宝鏡を持ち、天忍穗耳尊に授けて、祝きて曰わく「吾が兄、此の鏡鏡を視まむこと、吾を視るが猶（ごと）くすべし、与（とも）に床を同じくし殿を共にして斎鏡（いはいのかがみ）と為すべし」とのたまふ。複天兒屋命・太玉命に勅したまはく、「惟爾（これなむち 汝）二神も、同じく殿内に侍ひ、善く防ぎ護りまつることを為せ」とのたまふ。……兄を生みたまふ。天津彦火瓊瓊杵尊と号す。因りて此の皇孫を以ちて、親に代えて降らしめむと欲す。故、天兒屋命・太玉命と諸部神等を以ちて、悉皆に相授けたまふ。

と記述されている。つまり『記紀』は天照大神が自ら授けた宝鏡を、吾と思ひ斎祀れと勅された相手の神の名は天兒屋命・太玉命であり、相殿神とされている天手力男神と万幡豊秋津神ではない。

又、『倭姫宮世紀』にも倭姫命が天照大神を奉戴して行幸した際の記述に〔相殿神は天兒屋命・太玉命、御戸開闢神は天手力男神（多気町にある佐那神社の祭神）と万幡豊秋津神（拷幡姫命 天忍穗耳尊の妃 思金神の妹）等を相副って仕へ奉る〕とある。

『古語拾遺』では、『記紀』と同様に天兒屋命・太玉命に殿の内に侍りよく防ぎ護るという役割のほか、

「……。吾が高天原に御しめす（食事をなされる）斎庭の穂（神に擲る稲を育てる神聖な田の稲の穂）を以て、亦吾が兄に御せまつれ（食べさせなさい）。太玉命、諸部の神を率て、其の職に仕え奉ること、天上の儀の如くせよ」とのりたまふ。仍りて、諸神をして亦与に陪従へしめたまふ。

とあり、天照大神と高皇産靈尊が斎部（忌部）氏の遠祖である太玉命に諸神を率いて、

天上と同じように神田の稲でお食事を差し上げるように命じた。相殿の主役は太玉命としている。

相殿神の由来については色々な伝承がありよく分からないが、高天原神話で一定の役割を演じた神々ではある。

月読宮には月読宮と伊佐奈岐宮、伊佐奈彌宮が祀られている。

高天原神話に登場する主要な神々がこの地に祀られているのは磯部神話としては見落とせない。この地を高天原に比定する根拠は十分にある。最有力候補であると言える。さらにそれを補強する要素として次項に記す天の岩戸がある。

参考資料 伊勢志摩逢坂峠越寛書 中村精式 志摩郷土会

日本書紀 1 新編日本古典文学全集 巻第一神代[上]～巻第十応神天皇 小学館

古事記 新編日本古典文学全集 小学館

日本の神話 神話の森ホームページ

古語拾遺 斎部広成撰 西宮一民校注 岩波文庫

日本神話論 三品彰英 岩波講座日本歴史 23 別巻 2 岩波書店

サルタヒコ考 猿田彦信仰の展開 飯田道夫 臨川書店

4. 天の岩戸・風穴

もう一つの高天原神話について学習する。天の岩戸である。

『磯部町史』には天の岩戸（滝祭窟）に就いて次のように記述されている。即ち、

恵利原逢坂山の中腹に石灰岩の洞窟がある。昔からこれを天の岩戸と呼んで尊崇し、この付近一帯を高天原と呼んでいた。この洞窟からきれいな水が流れ出て、四季を通してその流量に変化がなく、磯部川の源流となっている。……。又、天の岩戸の付近には「御池さん」とも「風穴」とも呼ばれる石灰岩の洞窟があった。

この「天の岩戸物語」は、伝承によって岩戸からの迎神の神事に関与した神々に若干の異伝はあるが、天照大神が高天原の最高神となり、田を作り神衣を織って、新嘗の祭儀を行っていたこと、大神が岩戸の中に隠れたこと、迎神のため神々が集まって儀礼を行い日の神（大神）を迎え出したことで構成されている。岩戸伝説も天孫降臨伝説と同様に語り継がれるに従って変化し、『記紀』もそれを反映し、ともに岩戸伝説とそれに続く天孫降臨で天照大神を皇祖神と位置づけし、また、『日本書紀』では天児屋命（折耜）を藤原氏（中臣氏 伊勢神宮祭主の大中臣の始祖でもある）の遠祖、天鈿女命（伊弉）を猿女氏の遠祖などと『記紀』の編集に関わった氏族が高天原神話に登場することになった。

神話学や民俗学では鏡は太陽、勾玉は太陽の魂、賢木（さかき）は神の依代、賢木に鏡と勾玉を掛けることによって、太陽を呼び戻されたのである。いうなれば天の岩戸の様々な儀式は太陽（日の神）の魂呼びの神事なのである。神々の「わらい」も呪術的な要素を含んでいる。この場合の「わらい」は太陽の復活を願い大地の生殖力を促すものでなければならない（加藤憲）。

天の岩戸神話は稲霊の再生儀礼で、天鈿女命の裸踊りを生殖と結びつけて穀物の豊穰を願った象徴的なものと見る（飯田道夫）。



古代西日本の皆既日食

ユリウス暦日	皆既食の地域
AD158 7/13	出雲と近畿を斜断
AD248 905	九州と奥羽を横断
AD454 8/10	九州中部を横断
AD522 6/10	山陰と近畿北部を横断
<u>AD158VII13の日食</u>	
奈良盆地での食始めは17:59、食甚 18:55 日の入19:11 (食分0.68)	

『記紀』におけるこの話は、天照大神が失われる事によって無秩序と混乱がもたらされ、天照大神を引き戻すことによってその危機が回復されたということである。皇祖神天照大神の葦原中つ国に対する偉大な影響力を誇示すると共に、日の神としての穀物の豊穡の威力を強調したものであろう。その結果、皇孫がこの国を統治することの正当性を強調したものである。大和朝廷は各地の米作農耕民たちを支配するため「日の神（女神・母系社会）」の信仰を大和朝廷に集約する目的で、各地にバラバラであった日の神を統一的な日神として構想し、それを皇祖神の位にまで高めた。

天の岩戸事件は日食説と冬至説がある。私は日食説をとりたい。文学者の斎藤国治氏と加藤真司氏は古代の日本列島で西暦158年7月13日、247年3月24日と248年9月5日に皆既日食が確認されているという（現在の天文学では容易に計算されよう）。

大和朝廷の皇祖神とされる天照大神に就いては『日本書紀』や『古事記』では神話として取り扱われてはいるが、実在の年代を推定できないかとの試みが史家の間で行われている。

神話に現れる神の実在の年代を推定しようということは馴染まない話ではある。然し皇祖神という位置付けをしようとすれば、何らかの歴史的な裏付けが求められる。

そして、その代表的な意見としては、卑弥呼没年の投影として天照大神の「天の岩戸」事件を西暦247、8年の九州地方の皆既日食現象と結びつけて天照大神の活躍年代を特定しようとする意見は多数あり一応説得力はある。（上図参照）然し、私の見解（科学的根拠はない）は天照大神の存在を3世紀とすると、『日本書紀』や『古事記』に記述される古代天皇在位の説明が苦しくなる。2世紀中期の西暦158年に起きたという日食現象が、「天の岩戸」事件と関係があるとすれば、実在時期が西暦2世紀中頃と考えられ、史実としての説得力が一段と高くなるのではないかと思う（我が国の紀年を考える 拙稿）。

天の岩戸といわれる水窟は全国に存在する。その全てが悠久に絶えることのない水源としての水窟である。

逢坂峠にある天の岩戸について、『志摩国・一の宮磯部まいり』（天保5（1834）年）は聞いた話として次のように紹介している。

……此水洞に入し人の話を聞くに洞口入ること五間（約9m）許のうち岩角葉研まりになりて水漲り流れ、もし此所に仆るゝ時は起ること能はずと、扱其所を過て奥に潤き所あり、前面は巖壁にして水は上より滝の如く落くるをも（み？）て其水源はきめがたし、横なる巖壁に聖徳太子の像の如きを彫り続松（た

いまつ) にて見ざれば中暗くして見えがたく是弘法の作にて大御神の御像なるよしと云い伝えたり。…

又、『伊勢参宮名所図会』(寛政9 (1797) 年) では次のように紹介されている。

……是より谷へ二町斗下りて岩窟あり。其穴に入事凡十間(約18m) ばかりにして瀧有、瀧祭窟と標石を立てり。

洞穴の奥行きに約9mの差があるが、両文書の記述から江戸末期には瀧祭窟(窩)と呼ばれる水窟として語られており「天の岩戸」とは言われてはいなかった。それが何時の頃から「天の岩戸」という名を冠した水窟になったのかよく分からない。内宮境内に滝祭宮として、五十鈴川の水の神として弥都波能売神を祀り、皇大神宮の所管社で、別宮に準じて祭典も行われている。

この瀧祭窟と呼ばれる水窟は洞口に比べ洞内は相当大きくこの水系は五十鈴川、島路川、神路川の共通の水源であることは事実であろうと思われる。

水窟の脇に「罔象女大神 水神」と彫られた石標がある。この神も全国の水窟に祀られている湧水の神である。『古事記』では弥都波能売神という。



我が逢坂の天の岩戸も天照大神伝承というより神聖な水源として信仰の対象になっていると中村氏は言う。

逢坂山に降った雨水をきれいに浄化・冷却し、幽邃な洞窟からコンコンと吐き出して尽きるところがない。ほとんど神技に近い。この地の通称天の岩戸はあまねく知られている。にもかかわらずこの名に当然附和さるべき天照大神の岩戸がくれの神話を、この地に結びつけるものは、昔から全然これを聞かない。だが、依然としてここは聖地と信ぜられた。ここを聖地とする所以はこの水にある。清冽の水を吐いて、しかも万古尽きないのはまさに神の威によるものであると考えて、ここに水の神「罔象女大神」を祀った。雨乞いの様式は村によって幾分のちがいがあ。それぞれの形式に従って祈願をつづけても効験を得られない場合は、最後の切り札として、天の岩戸に参詣して祈願を込めた。そして帰りにはこの志摩の最高の水をもらって来たという。

岩戸の水は、飲めば息災を保ち、洗えば眼病が癒えるといわれるが、恐らくは後世に派生した信仰で、もとは雨乞いの貰い水ではなかったかと思う(中村精武氏)。

然し私は日の神としての天照大神と悠久に絶えることのない水源を結び付け水田耕作の中心に天照大神を位置付ける物語としたものと考えたい。

先ず、この神(罔象女大神)についての『古事記』の記述を引用する。

……。次に、火之夜芸速男神(ひのやぎはやをのかみ 物を焼く火勢による名か)を生みき。亦の名は、火之炫毘古神(ひのかかびこのかみ)と謂ひ、亦の名は、火之迦具土神(ひのかぐつちのかみ 火がちらちらと燃えることの神格化)と謂ふ。此の子を生みしに因りて、みほと(ホトは女陰の称)を炙(や)かえて病み臥して在り。たぐり(嘔吐物のこと)に成りし神の名は、金山毘古神(鉾山を意味する)。次に、金山毘女神。次に、尿に成りし神の名は、波邇夜須毘古神(ハニ 「埴」は草木の苗を植えて増やすのに用いる水持ちの良い粘土)。次に、波邇夜須毘売神。次に、尿(ゆまり)成りし神の名は、弥都波能売神(水の霊)。次に、和

久産巢日神。此の神の子は、豊宇氣毘女神（ウケは食物のこと）と謂ふ。故、伊耶那美神は、火の神を生みしに因りて、遂に神避り座しき。

……。故爾くして、伊耶那岐神の詔はく、「愛しき我がなほ妹の命や、子の一つ木に易らむと謂ふや」とのりたまひて、乃御枕方に葡萄ひ、御足方に葡萄ひて哭きし時に、御涙に成れる神は、香山の畝尾の木本に座す、名は泣沢女神ぞ。……。

一方、『日本書紀』にはどの様に記述されているだろうか。以下に要約する。

本書、一書第一 （伊奘冉尊の死の記述はなく従ってこの物語はない）。

一書第二 火神軻遇突智を生み、その為に焦かれて終ります。その終りまさむする間に、土神埴山姫と水神罔象女（美都波）を生みたまふ。軻遇突智、埴山姫を娶り稚産霊（わくむすひ 火と土とから若い生成の精霊が生まれたとは、焼畑農業の起源説話か）を生む。此の神の頭の上に蚕と桑と生り、臍の中に五穀（いっくさのたなつもの）生れり。

一書第三 伊奘冉尊、火産霊を生みたまひし時に、子に焦かれて神退ります。其の神退りまさむとする時に、則ち水神罔象女と土神埴山姫を生み、又天吉葛（あまのよきづら 葛根のような食料になる葛草か）を生みたまふ。

一書第四 伊奘冉尊、火神軻遇突智を生まむとしたまふ時に、悶熱ひ懊悩み、因りて吐したまふ。此神に化爲る。名けて金山彦と曰す。次に小便したまふ。神に化爲る。名けて罔象女（水の神 鎮火に水を用いた）と曰す。次に大便したまふ。神に化爲る。名けて埴山媛と曰す。

一書第五 火神を生みたまふ時に、灼かれて神退ります。（諸神の誕生はない）

一書第六 ……。土神を埴安神と号す。然して後に悉に万物を生みたまふ。火神軻遇突智生るに至りて、其の母伊奘冉尊焦かれて化去ります。時に伊奘諾尊恨みて曰はく、「唯一児を以ちて、我が愛しき妹に替へつるかも」とのたまひ、則ち頭刃に葡萄ひ、脚刃に葡萄ひて、哭泣き流涕したまふ。其の涙墮ちて神に爲る。是即ち畝丘の樹下に居す神、啼沢女神と号す。遂に帯かせる十握剣を抜き、軻遇突智を斬りて……。復剣の頭より垂る血、激越りて神に爲る。号けて閼竈（くらおかみ 山の水神）と曰す。次に閼山祇（くらやまつみ 谷のある山の水神）。閼罔象（くらみつは 谷の水神）。

一書第七 伊奘諾尊、剣を抜き軻遇突智を斬り、三段に爲したまふ。其の一段は是雷神に爲り、一段は大山祇神に爲り、一段は是高竈に爲る。

一書第八 伊奘諾尊、軻遇突智を斬る物語はあるが罔象女などには触れていない。

一書第九、十、十一 記述なし。

『記紀』の記述は神名などの違いはあるが、物語としては概ね同じ内容である。即ち、伊奘冉尊（『古事記』では伊耶那美神）は国生み、神生みを成し遂げた後、最後に火神を生み神退ることになる。そしてその苦しみの中で、農業・鉱業などの生産に重要な関わりをもつ神を生む。

1. 金山毘古神、金山毘女神

嘔吐物から生まれた神。鉄の生産により農業飛躍的に発展したことを象徴しているか。

2. 波邇夜須毘古神、波邇夜須毘売神（『書紀』では埴山姫という）

屎（大便）から生まれた神。埴とは苗を植え植物を育む水持ちの良い粘土のことをいい、又肥沃な田畑を生みだす肥料となる大便を肥料の神とした。

焼畑農業の起源説でもある。火と土から土器や陶器の起源説話とも解釈できる。

3. 弥都波能売神（『書記』では罔象女（美都波）という）

尿から生まれた神。水の霊。肥沃な田畑を作るには清らかで穏やかな水が必要である。弥生時代の水稲栽培には絶対不可欠。内宮の所管社滝祭神として祀られている。

4. 豊宇気毘女神

『記』では和久産巢日神の子で、食物の神とされる。豊受大神が連想される。

稚産霊

軻遇突智、埴山姫を娶り生まれた神。神名から豊宇気毘女神の親神である和久産巢日神と重なる。此の神の体から蚕、桑そして五穀が生まれたという事から豊宇気毘女神に重なる。恐らくこの二神は同一神と思われ農産物の神である。

天吉葛

地上に実る食物のみでなく、葛根のような地下に実る食料の神。

5. 啼（泣）沢女神

伊弉冉尊が火神を生みお隠れになった時、伊弉諾尊は非常に悲しみ「頭辺に葡萄ひ、脚辺に葡萄ひて、哭泣き流涕したまふ」その時に落ちた涙から生まれた神。一説によると雨は天地の涙であり、降雨の神。

6. 閼竈（高竈）・閼山祇・閼罔象『書記』のみに語られている）

何れも山間部の山や谷の水神で水源の神を指す。これに対して弥都波能売神或いは罔象女は「水が走る」「水が這う」の意義があり、水源の神ではなく田畑を貫流して農業に恵を与える河川の神といえる。

『記紀』共に「伊弉冉尊」は万物を生み終えた後に、火神を生みお隠れになるとき、鉾物資源や農耕技術に対する神を生み、豊かな万物と同時に文明を用意した事を語り「豊葦原瑞穂国」を自らの子孫が統治することを正当化したといえる。

さて、この天の岩戸神話を整理してみると次の様になるう。

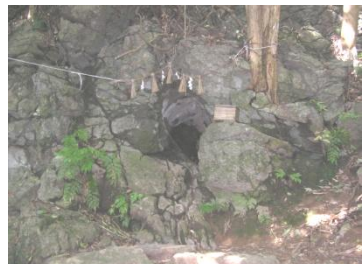
1. 日の神を皇祖神天照大神とした。
2. 岩戸籠りをした日の神を迎神する儀礼（宮中儀礼の原型）を語った。
3. 鉾物資源や農耕に必要な文明の神を生んだ。

さて、「御池」とも言われる当地の風穴に関する伝承は古文書の中に残されている。

風穴（ふうけつ、かざあな）とは、山腹などにあいた、冷気の吹き出る奥深い穴で洞窟の一形態を指すもので、洞窟（風穴）の内外で生じる温度差や風圧により、洞口（洞窟の開口部、出入り口）を通じての大気循環（風の通り抜け）があることと定義づけられる。

又、洞窟とは、地中にある、ある程度以上の大きさの空間のことをいう。ふつう人間が通過可能なサイズ以上のものを指すことが多い。洞穴（どうけつ、ほらあな）とも言う。水平方向に伸びている横穴や井戸状に開口している縦穴（竪穴）などもある。

かつて大沢は石灰製品の生産地であった（助田時夫氏）。



石灰岩は炭酸カルシウムを主成分とする堆積岩で、生物の遺骸が水中に堆積して生物岩と、海水中の石灰分が沈殿して生じた化学岩とがある。建築材や石灰・セメントなどの原料として広く利用されている。

我々が風穴と呼ぶ石灰洞は石灰岩が地表水、地下水或いは隆起の過程での海水などによって侵食（溶食）されて出来た洞窟であろう。この御池の風穴口からは風の吹き出しがあり、空気の移動の音も聞こえる。多分この山中の何処かに抜けている。

さて、風穴と神話との関連性について『記紀』の記述を調べてみた。

洞窟は死後の世界や異世界への入り口と見なされた例が多い。伊奘諾尊が伊奘冉尊を求めて「黄泉の国」へ行ったのも地下へ続く洞窟を通してである。黄泉とは死者の住む所、あの世のことである。黄泉はもともと地下の泉の意であり、地中の泉故に黄泉という。「黄」は五行説によると「土」を指す。

一般的に洞窟の洞口は小さいが内部は広大である。現代の科学的な調査資料がないので推測に過ぎないが、この風穴も多分広大な内部を伴っているのでは無いだろうか。

『伊勢参宮名所図会』に風穴（風穴）について次の様に記されている。

……水穴と同石質にて、口を北面に開く。洞中、数カ所に、穴あり。或ハ狭く、或は広く、延長、十町（約1090m）に及べりと云う。

恐らく先に記した天の岩戸水窟（瀧祭窟）内の滝とも繋がり、更に天の岩戸の項で推定したように五十鈴川、島路川、神路川の水源とも繋がっていることは間違い無さそうである。まだ未発見の洞口が山中にあるかも知れない。

この風穴のことを地元では「御池さん」と呼び、又大沢の谷も「御池さん」ともいう。当地にはこの風穴や「御池さん」の由来を語る神話や伝承はないが、この「お池さん」由来を考えてみることも磯部神話の一要素としての足掛かりとはならないだろうか。

『古事記』の「みそぎ」の段に次の様な記述がある。

（黄泉の国から逃げ帰った時）伊耶那岐大神の詔はく、「吾は、いなしこめ（醜い）、しこめき穢き国に至りて在りけり。故、吾は御身の禊を為む」とのりたまいて、竺紫の日向（编者注 禊の地に日に向かうところというイメージを与えるための表現で地名を宮崎県の日向に比定することはあまり意味がない）の橘の少門（をど 小さな港）のあはき原に至り坐して、禊祓（みそぎ）しき。……（禊の中で22神を生む）……。是に左の御目を洗ひし時に、成れる神の名は天照大御神。次に右の御目を洗ひし時に、成れる神の名は、月読命。……。

『日本書紀』の「天照大神・月夜見尊・素戔鳴尊の誕生」の段に幾つかの異説と共に、天照大神生誕の記述がある。

正文 ……。既にして伊奘諾尊、伊奘冉尊共に議りて曰はく、「吾已に大八洲国と山川草木とを生めり。何ぞ天下の主者を生まざらむ」とのたまわふ。是に日神を生みたまふ。大日靈貴（おおひるめのむち 天照大神）と号す。……。

一書第一 伊奘諾尊の曰はく、「吾御寓（あめのしたしら）す珍（うつ 珍しく貴いこと）の子を産まむと欲ふ」とのたまひ、乃ち左の手を以ちて白銅鏡を持ちたまふときに、則ち化出づる神有り。是大

日靈尊と謂す。……。

一書第六 ……。(黄泉の国から帰り着いたとき)……。伊奘諾尊既に還りたまひ、乃ち追悔みて曰はく、「吾前に不須也凶目(いなしこめ 穢いの意)き汚穢き処に到る。故、吾が身の濁穢を滌ぎ去らむ」とのたまひ、則ち往きて筑紫の日向の少戸の橋の櫛原(あはきはら)に至りて、祓除へたまふ。遂に身の汚れを盥滌ぎたまはむとして、乃て興言(ことあげ)して曰はく「上瀬は是太で疾し。下瀬は是太だ弱し」とのたまひ、便ち中瀬に濯ぎたまふ。因りて神を生みたまひ、……(多くの神を生み)……。然して後に左の眼を洗ひたまふ。因りて神を生みたまひ、号けて天照大神と曰す。……

一書第十 ……。(黄泉の国から帰ったあと)……。但し親ら泉国を見たまへり。故、其の穢惡を濯ぎ除はむと欲し、乃ち往きて粟門と速吸名門とを見す。然るにこの二門、潮既に太だ急し。故、橋乃小門に還り向ひて払ひ濯ぎたまふ。時に水に入りて磐土命を吹生し、……(天照大神の生誕は記述なし)

以上『記紀』の記述から天照大神の生誕の伝承を考えると次の様になる。

禊を行った地上界での場所を特定しているのは、『日本書紀』の「一書第六、第十」と『古事記』の記述である。伊奘諾尊(古事記では伊邪那岐大神)が黄泉の国から帰った後、禊をした時、天照大神など三貴神が生誕したという記述があるのは『日本書紀』の一書第六と『古事記』のみである。

今、私が求めたいのはその禊が行われた場所が何処にあるかである。

その地は『記紀』共に筑紫の日向の少戸の橋の櫛原(あはきはら)とされている。『日本書紀』・『古事記』(小学館)編集者たちのアカデミックな神話研究では、頭注に「宮崎県の日向に比定する説があるが、実際の土地そのものに意味があるのではなく、禊の地は東に面して日に向かう所と考えれば良い」とされている。

橋は元来「常世郷」から渡来した不老長寿の植物とされたので、その地がそういった理想郷であることが連想される。

『日本書紀』「一書第十」に「潮既に太だ急し。故、橋乃小門に還り向ひて払ひ濯ぎたまふ。」という記述から黄泉の国から帰った場所に戻った(還り向ひて)ということであるので、ここが黄泉からの出入口(風穴をイメージする)であったと考えてよいと思う。

実際にその地をウェブで調べてみると、宮崎市阿波岐原町産母に江田神社がある。その由緒は下記の通りで、社の近くに「みそぎが池(御池)」(下図)ある。即ち、

此の地一帯は古来所謂日向の橋の小戸の阿波岐原として、伊邪那岐の大神禊祓の霊跡と伝承せられて、縁起最も極めて深き社ならむ。禊祓の際天照皇大神、月讀尊、素佐鳴尊と住吉三神の神々が御降誕あらせられたる霊域の地と伝え、則ち上代における中ノ瀬と称せる御池本社を去ること約五丁の東北に現存す。後、世人入江を開墾して江田と称し(元は入り江であった)、里人俗に当社を産母様と称えて今日に至る。



私の素人考えでも、高天原神話は天上界の物語であり、地上界の地名に比定する必要はない。『記紀』の神話は大和朝廷の出自を日向の国としている。天孫降臨、神武天皇東征の出発地などの地上界との接点は日向の国とされている。従って天照大神を皇祖神に

見立てたこの神話の作者は皇祖神天照大神の出自も日向の国がイメージされるように語っている。古い伝承つまり天照大神が皇祖神とされる以前の伝承と思われる『日本書紀』の「一書曰」には生誕地には地上界の場所（日向の国を含め）が特定されていない。

宮崎市阿波岐原町産母にある江田神社は御池様とも呼ばれてきた。うっそうとした森に覆われた聖域だっただけに、「御池の西の森には大蛇が棲む」「行きがけにまたいだ巨大な松の倒木が帰りにには消えていた」などの言い伝えがあったという。（天狗伝説）

扱、今私が学習を試みている逢坂山中腹の風穴のことを地元では「御池さん」と呼ぶという。又大沢の谷も「御池さん」ともいう。当地にはこの「御池さん」に関わる神話伝承は残念ながら現在残ってはいない。磯部神話の一要素としての足掛かりとなるものは無いかと探し求めたのが、上記の宮崎市阿波岐原町産母に江田神社の近くにある「みそぎが池（御池）」である。

この両者に共通するものに「御池」或いは「御池さん」という池又は地名がある。以下の私の推測は人文科学的に全く無価値ではあるが書き留めておく。

「御池」又は「御池さん」という名を冠する池や地域には元々神聖な何かの由来があった筈である。宮崎市阿波岐原町の「御池」はその由来が現在まで伝承された例であり、我が恵利原の「御池」はその名のみが残り由来は伝承されなかった例であろう。

「御池」の地名を地上界の宮崎市に比定しようとする試みは意味がないと言われているとすれば、どのような条件を備えたら当地区も「御池」伝承に立候補できるかを考えて見る。

『記紀』の記述を整理する。

1. 東に面して日に向かう所

風穴から大沢谷は古道が通る尾根から東斜面にある。

2. 上流は流れが速く、下流は流れが遅く、中流で濯ぎ給うということで、清流の浅瀬が流れる所

昔、大沢谷でワサビの栽培が行われていたという古い話があるという。沢ワサビは流水を利用したワサビ田で栽培される。冷涼な気候と溪流など日陰を好む。このことから聖なる溪流の澱みの場があったことが連想される。

3. 黄泉からの出口（風穴をイメージする）のある所

穢れた黄泉の国から帰ってすぐ禊を行い身を清めたという話とピッタリ符合する。

4. 『記紀』の伝承ではないが、宮崎市阿波岐原町の伝承に、「御池の西の森には大蛇が棲む」「行きがけにまたいだ巨大な松の倒木が帰りにには消えていた」などの言い伝えがあったという。我が御池に接する東の森「北の河内」には恐ろしい魔所があり、天狗がいたという天狗伝説があった。何れも魔界がイメージされる。

（大沢谷に溪流が今なお流れているのか、老体の私には確かめる術がない）。

以上の事から我が「御池」も天照大神生誕の聖地として立候補するに十分な条件を備えている。

神話の体系が作られたのは、西暦6世紀推古朝のちょっと前、西暦5世紀末に北九州で起きた磐井の乱（任那を巡る日本と新羅との争いの中で筑紫国造の磐井が新羅の勢力と組んで朝廷に反抗した事件、西暦528年に鎮王）の危機を乗り越えた大和朝廷国家が作り上げられた頃である。そして帝記や旧辞が書かれ日本神話の体系が出来る（井上光貞氏）。

史実としての根拠を全く持たないが、私の年代考証から神話に登場する神々の実存年

代を推定すると次の様になる。

天照大神	西暦 2 世紀中葉	天の岩戸事件を西暦 158 年と推定	日の神から皇祖神
猿田彦命	西暦 2 世紀中葉	天孫降臨を西暦 2 世紀後期と推定	宇治土公氏の遠祖
天鈿女神	西暦 2 世紀中葉	天の岩戸事件を西暦 158 年と推定	猿女君の遠祖。稗田阿礼の遠祖
神武天皇	西暦 2 世紀末期	即位西暦 181 年と推定	大和朝廷初代天皇
倭 姫 命	西暦 4 世紀前期	垂仁紀を西暦 329～335 年と推定	天照大神を内宮の地に創祀した皇女

神話は、古代人の生活経験とそれに対応する古代人達の諸反応を口頭で語り伝えた伝承文化であり、後に文字化され、古典神話として整備され我々に届けられた遺産である。口頭による伝承の可変性、国家的史籍のうち編みこまれている政治意識などを考慮しなければならない（三品彰英氏）。

『記紀』に記述されている神代の伝承は、西暦 2 世紀の中頃から 3 世紀の中頃の間の経験を語り伝えた伝承文化である。その経験を古代人（渡来人）のかつての故郷の伝承を基に組み立てたり、国家の政治権力に影響を受けたりして、伝承の中身は地域や時代によって変化を生んだといえよう。『日本書紀』にみられる異伝（一書曰）はそれを書き並べた結果によるものであろう。

私の推測では高天原神話は西暦 2～3 世紀を体験した古代人の語り伝えであり、地域・時代でその地、その時代で変化して夫々伝承されたものであろう。

我が恵利原にも高天原神話の舞台に相応しい第一級の条件は十分備わっている。磯部神話として、高天原・神宮祭祀・猿田彦・天の岩戸などなどの高天原神話がこの地で完結する。

参考資料 磯部町史 磯部町史編纂委員会

日本書紀 1 新編日本古典文学全集 巻第一神代[上]～巻第十応神天皇 小学館

古事記 新編日本古典文学全集 小学館

日本神話論 三品彰英 岩波講座日本歴史 23 別巻 2 岩波書店

サルタヒコ考 猿田彦信仰の展開 飯田道夫 臨川書店

『古事記』『日本書紀』77の謎 歴史読本 8（2009） 加藤憲 新人物往来社

我が国の紀年を考える 大屋行正

志摩国・一の宮磯部まいり 志摩のはしりかね 岩田準一

伊勢志摩逢坂越寛書 中村精式 志摩郷土会

神話から歴史へ 井上光貞 中央公論社

5. 家立茶屋

峠からの下り坂を降り切った所に今は石柱のみを残す家立茶屋跡がある。

猿田彦大神此地を開き家をたて始め給ひしゆへに家立の茶屋といふとて。表の戸一枚にむしろを以てして今に改めず。別に竈の間あり石三ツの上に土の釜をすへたり。又家に仏事をなさずと云。然れ共埴成書見る事なし

というこの口伝は『伊勢参宮名所図会』の家立茶屋の絵図の説明文である。矢張りこの

辺りも猿田彦命の地盤のようであった。当地区での猿田彦命は先住民の実力者（国つ神）とされている。我が列島に長く君臨し支配した縄文の民のこの地区での長（おさ）であるのか、天孫族に一步先駆けて渡来した海人族の支配者なのか。諸説が多い。

縄文人の木文化は誇るべきものであったらしい。巨大動物が絶滅した後、人々の居住は住み難い洞窟から地上へと移った。所謂竪穴住居の始まりである。

竪穴住居は、地面を数十cmから1m以上掘り下げて床（土間）とした半地下形式の茅葺の屋根を周囲の地上に至るまで架けた家屋であると想像されており、縄文・弥生期から平安期に至るまで、庶民の住居として普及、継承されたことはよく知られている。当地区もその例外ではなかった。

縄文時代の進んだ建築技術については拙稿、勢田川調小留書2『竪穴住居を考える』で学習したので、詳細は省くが、「鉛直・水平・角度」を出すことを知っていたし、尺度を持っていたとも言われている。木材の加工でも「割裂法」により作られた板材、「ほぞ穴・貫・貫穴」などと呼ばれる加工技術を施した遺構などが発見されており、掘立式高床式建物も縄文時代に既にあったのではないかとされている。

逢坂峠周辺の五十鈴川上流地帯には古くから高度の技術を持った先住民（縄文人）がいたことは疑いない。その住民たちを束ねる猿田彦命が険しい峠の裾野を開き古い日本式の住居を立て始めたという里の口伝は、たとえ遺跡が発見されていなくても受け入れていいのではないかな。

私の推論では天照大神的人物の実在時期は2世紀中葉であり、猿田彦命的人物も同時期と思う。逢坂峠に由来するこの二神はほぼ同時期に実在したのではないだろうか。天照大神より猿田彦大神のほうがこの地区においては先住神といえる。

猿田彦命がこの地区の開発者であり、地主神であり、英雄的先駆者としての伝承はすべて口伝である。



参考資料 竪穴住居を考える 勢田川調小留書（2）大屋行正

伊勢参宮名所図会 節関日

6. 分福茶釜

『伊勢参宮名所図会』の家立茶屋の挿絵の説明に「別に竈の間あり、石三つの上に土の釜をすへたり」と記されており、又、『磯部まいり』にも「かの鼎を祭りし前なる簾戸」云々とある。いつ頃からそう呼ばれるようになったかは記録には残っていないが、これがこの地区の分福茶釜物語の主人公であると言われている。

茶釜はモノクロームであるので色彩は分からないが形状は右図（志摩市立磯部郷土資料館学芸員 崎川由美子氏ご提供）の通りである。

中村精式氏は『逢坂峠越覚書』の中で、他国の分福茶釜と同様にお伽噺に出てくるように人から人へと渡り時には姿を消すという遍歴が記されている。他国の分福茶釜伝承



と異なるのは狸と和尚が登場しない。詳しくは『逢坂峠越覚書』に譲る。

釜は手製の土釜。民家常用の茶釜に似た形で、「丸型の中央が膨れて腰鍰のある茶釜」という条件を具えている。全体が煤けて黝（あおぐろ）くなっている。ところどころが赭（あか あかつち）く素膚がのぞいている。鍰より上には粗雑な櫛目紋がある。土師器（はじき）と見た。口の径12cm、胴の径23cm、高さ17cm、胴の中央に2cmの鍰がある。多分古い時代出土品と思われるが、どこでなどと詮索することは野暮なことだろう。家立の茶屋に納まった瞬間から、来歴は隠そう、忘れようとつとめてきただろうからである（中村精武氏）。

櫛目紋の土師器は古墳時代から平安時代にかけて用いられた素焼の土器と言われている。

この土器が江戸後期にこの茶屋に存在したとするなら、西暦2世紀頃に在世したと思える猿田彦命の人物も愛用したかもと言う想像は無理かも知れないが、家立茶屋の前身の古さがうかがわれる。何故なら、江戸後期には磯部の遺跡・遺物の発掘は多分行われていなかったと思われるから、何処かの遺跡から出土したものとは考えにくく人から人へと伝承されたのではないだろうか。

参考資料 伊勢志摩逢坂越覚書 中村精武 志摩郷土会

日本神話の成立

律令国家の成立と藤原氏——日本神話成立の背景

前章までの「日本神話」を引用して神話に登場する神々の立場にスポットを当てて来たが、特に「天孫降臨」、「天の岩戸」神話がどのような経過を経て、文字化され伝承されてきたかについて学習して置きたい。

「日本神話」の最初の形が一通り出来上がったのは西暦6世紀の中頃（旧辞の成立が欽明朝と推定されている）で、『記紀』撰述の100年余り遡った頃と推定されている。

聖徳太子によってたてられた律令制国家建設の見取り図を実現完成させたのが藤原不比等である。大宝律令の制定、奈良遷都、『記紀』の編纂は不比等の事業といわれている。

白村江の戦いに敗れて友好国百済が滅亡し、天智朝はその多くの棄民を受け入れることになった。壬申の乱を制して皇位に就いた天武天皇（大海人皇子）政権は三韓を制した唐と新羅の影響を大きく受けることとなった。王宮内でも新羅系、百済系の確執が激しかった。

天武天皇崩御の後、即位して持統天皇となった鸕野讃良（うののさらら）皇后と不比等は大陸や半島の影響を避けて日本国の独立を実現するには如何にするべきかを図り合った。

1. 日本国に在住する三韓系、高句麗、新羅、さらには亡命百済系（持統一族を含む）など全ての在住者を統合し新しく「日本人」を形成する方法や如何に。即ち、
2. 天武天皇が廟堂で制定を公布した日本律令の実現や如何に。
3. 天武天皇によって提唱されて中断中の修史事業の実現方法や如何に。

これに対して不比等は次の様な答えを出した。即ち、

1. 白村江の敗戦によって、百済からの多くの棄民が移住し、唐からも多くの使節が派遣されてきて、威嚇的な性格をもっていたとも思われる。日本国に居住する各国人が統合された「日本人」となるためには、全住民が唯一の権力者、絶対化された主権者により統合される必要がある。その為にこれまでの「王」の称号を「天皇」に改め神格化（現人神）してその血脈を代々伝え不可侵の神とする（革命などによる皇権の交代を否定）。天武・持統の血脈の継承とそれを裏付ける神話を創作する。
2. 日本律令の中に「天皇号」を取り入れる。そして中臣家が主宰してきた神事を、天皇主権に結び付けて律令制の中に組み込む。不比等は中臣氏の神官職を正式に国法による神事担当者として位置付ける。
3. 「天」を至上とし、その「命」を受けるのが「皇帝」で「天命」を失った時「皇帝」は否定されるというのが唐の体制である。『史記』の「周本記」に言う「上帝」である。これに対して我が国の「天皇」は革命否定の絶対天皇制を打ち立て、天皇を「上帝」そのものとして覆すことのできないものと設定し唐の体制に対抗した。
その為に「天皇」は天から降臨したものであるという設定が成り立たねばならない。つまり『日本書紀』に記述された「天孫降臨神話」がそれである。神話のストーリーは天武天皇から聖武天皇に至る皇統の継承劇の反映と言える。

参考資料 日本書紀の暗号 真相の古代史 林青梧 講談社
大化改新 岩波講座 日本歴史 古代2 関晃 岩波書店

不比等の皇位継承と神話創作の企て

不比等は国家の中心イデオロギーを仏教でなく神道に求め、そのイデオロギーに基づいて史書は撰修された（梅村猛氏）。つまり『記紀』の編纂事業である。

『日本書紀』編纂の目的は大王（天皇）中心とする有力氏族の秩序を明らかにすること、各氏族の上に君臨する王権の超越性を明確にすることである。

現実の天皇が、豊かな学識とすぐれた人格の持ち主とは限らない。とすればそれ以前に、根本的に天皇の権威が確立されていなければならない。草壁皇子、珂瑠皇子（後の文武天皇）首皇子（後の聖武天皇）の血筋を父系をたどって遠く神代まで遡らせ、高天原・天孫降臨に始まる万世一系の神話を創造することだったのである（不比等は珂瑠皇子と首皇子に娘の宮子と光明子を嫁がせた）。これが完成すれば、揺るぎない権威を天皇家と藤原氏が掌中に行うことができる。

不比等はそう考えたのであろう。

不比等としては、自らが擁立した文武天皇・聖武天皇に対しては、外戚の立場から実質上天皇の人事権を掌握し、それを背景に太政官を支配したのであるが、その際、利用する天皇に十分な権威が備わっていなければならない。その為には、前項に記したとおり天皇の神格化が必要であった。それが、『記紀』の神話なのである。

大化の改新以来の鎌足と不比等の功績により、天皇中心の律令国家が成立したが、不比等は、其の最終段階において、草壁皇子に皇位を伝えたい持統天皇に協力しつつ実権を握った。然し草壁皇子の夭折により、その子の珂瑠皇子（文武天皇）が急遽即位した。

持統天皇の没後、不比等の娘の宮子が生んだ首皇子（聖武天皇）を擁して独裁体制を確

立した。その藤原氏の支配の論理を、巧みに織り込んで不比等が作成したのが『記紀』の皇統の神格化神話（天孫降臨神話）である。藤原氏自身の王朝支配は自らが天皇になるというのではなく、天皇の権威を利用して権力の実質を握った。

草壁皇子と珂瑠皇子（後の文武天皇）の擁立

持統天皇と不比等は協力して天武10（681）年の律令・歴史書編纂事業から始まる国家改革に乗り出す。その改革の目的は王権の確立である。持統天皇（天武天皇の皇后）は自らの血筋への皇統の継承（草壁皇子・珂瑠皇子）を念願し、其の実現が不比等に託されることになる。天武15（686）年天武天皇が崩御し、実権は皇后（後の持統天皇）が掌握し、異腹の大津皇子を謀反の疑いで葬った。然し草壁皇子への皇位継承に手間取る間に草壁皇子が亡くなり、その為この計画は実現しなかった。草壁皇子の遺児珂瑠皇子（後の文武天皇）は7歳であったため、将来の珂瑠皇子の即位のための中継ぎとして、祖母の持統天皇が自ら即位する。その即位には、草壁皇子のために用意された天皇の即位儀式が整えられていた。

天皇は至高の存在であらねばならず、その根拠が必要となる。それは天皇の神格化であると不比等は考え、草壁皇子の即位のために、天皇の神格化を用意した。後に柿本人麻呂が草壁皇子を神として讃える賛歌（草壁皇子の死により挽歌となった 万葉集巻二 挽歌の引用は省略する）の中に隠されているという。大山氏は、この中に歌われている天照らす「日女の命」は持統天皇を指しており、葦原の瑞穂の国を……知らしめす「神の命」或いは「高照らす日の皇子」は今は亡き天武天皇を過去の人として神格化している。そして「我が大君皇子の命」は草壁皇子のことであるという。この段階で、柿本人麻呂の手によって天皇神格化のための神話の原型が作られたと言えよう。草壁挽歌が歌われた持統称制3年が天皇神格化の画期だったことになる。

天武天皇の皇位の継承者である草壁皇子の死により、持統天皇の次の願望はまだ7歳の草壁皇子の遺児珂瑠皇子の即位に切り替えられたが、未だ幼い皇子のため中継ぎ的に持統天皇が称制4（690）年に天武天皇を継承し即位した。そしてその後、持統天皇と不比等の権勢の元に持統11（697）年に珂瑠皇子（文武天皇）の即位が実現した。

『日本書紀』では持統天皇の没後の諡を「高天原広野姫」とし、「高天原の支配者 天照大神」となり、「高天原神話」の枠組みが出来上がってきた。

首皇子（後の聖武天皇）の擁立

大宝2（702）年持統天皇が亡くなった。その4年後の慶雲3（706）年文武天皇が倒れた。当然首皇子への皇位継承を考えるが、大宝元（701）年生まれ的首皇子は余りにも幼い。然し草壁系の皇統を守るという亡き持統天皇の意思を実現しようとする不比等の決意は固かった。珂瑠皇子（文武天皇）のために持統天皇が中継ぎとして即位したように、今回も首皇子の祖母に当たる阿閉皇女（元明天皇）が、更に引き続き伯母、氷高皇女（元正天皇）が即位し、首皇子の成長を待つて皇位を伝えることになる。不比等は元明天皇の即位を正当化するために、元明天皇が大化の改新とその後の改革をリードした偉大な天智天皇の娘であったことを強調し（不改常典）、この皇位継承に利用した。

不比等の娘（養女）宮子は文武天皇の皇后となり首皇子の母となる。不比等のもう一人の娘光明子は聖武天皇（首皇子）の皇后となり、まさに不比等の全盛期であった。

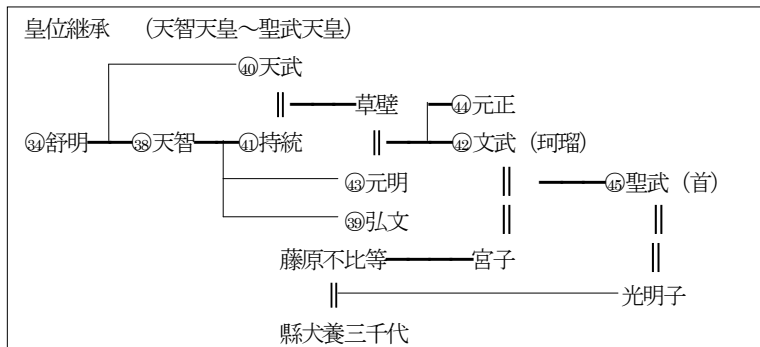
不比等による皇位継承と天孫降臨神話

前項の不比等の天皇擁立劇が天孫降臨神話にどのように対応しているかを考えるために『記紀』に記されている幾つかの相違する神話を天孫降臨の指令神（高天原の最高神）が誰であるのかで整理すると次のようになる。

神話の要素	高皇産巢霊神	天照大神
降臨神	邇邇芸命	忍穗耳尊から邇邇芸命に変わる
降臨神の容姿	真床追衾に包まれた嬰兒	降臨間際に出誕。容姿記載なし
随伴する神々		五部神 猿田彦命
神器の授与		三種神器の授与
統治の神勅		統治の天壤無窮の神勅授与
猿田彦と伊勢		皇孫の道案内後伊勢へ
記述伝承項	正文、一書第一、二以外の一書	一書第一、（古事記）

五部神 天兒屋根命・太玉命・天鈿女命・石凝姥命・玉祖命。

『日本書紀』一書第二、『古事記』は指令神を高皇産巢霊、天照大神の二神。



前項までの整理の繰り返しになるが、上記の皇位継承の図の皇位継承者を『日本書紀』の高天原の神々に対応すると次の様になる。

1. 指令神を天照大神とする「一書第一」の場合

天照大神＝持統天皇、忍穗耳尊＝草壁皇子、邇邇芸命＝文武天皇となる。

実現しなかったが、草壁皇子の皇位擁立は、天皇神格化の準備段階であるといえる柿本人麻呂の挽歌にも高天原、天照大神はまだ現れていない。草壁皇子の即位を天上の神々の意思とするだけである。「天照らす日女の命」が登場し、それが持統を指している。皇祖神はまだ出現していない。

草壁皇子の死により文武天皇が皇位を継承する。『日本書紀』一書第一の後段では話は進化して高天原が成立する。

即ち、降臨の指令神は天照大神となり、降臨神も忍穗耳（草壁皇子）から邇邇芸命（文武天皇）に変更される。邇邇芸命の母は思兼神の妹万幡豊秋津媛命。随伴神は天の岩戸系の神（天兒屋根命（中臣の祖）、太玉命（忌部の祖）、天鈿女命（媛女の祖）、石凝姥命、玉屋命の五部神）、三種神器授与、統治の天壤無窮の神勅、先導神猿田彦大神（鎮座伊勢の狭長

田五十鈴川上 伊勢神宮への天照大神の天降りも先導か）。

持統4年の『日本書紀』の記事に、「物部麻呂朝臣大盾を樹つ。神祇伯中臣大島朝臣天神寿詞を読む。畢りて忌部宿禰色夫知神璽の剣・鏡を皇后に奉上る、皇后即天皇す」と記されている。これは天の岩戸神話の迎神儀式と酷似している。天照大神系にある随伴神、神宝・神勅などは、持統天皇即位の段階で成立していた即位儀式となり、文武天皇擁立の出発点となった。かくして、**天照大神が皇祖神として高天原に君臨し、天孫降臨の出発点となる日本神話固有の高天原神話が誕生した。**

珂瑠皇子（文武天皇）の母、阿閑皇女（草壁皇子の妃）の最大の望みは持統天皇の次の天皇に珂瑠皇子を就けることである。このことは持統天皇の願いと一致していた。然し持統天皇を中心とする女子天皇家の人々は自分たちでこの願望を成就できるとは思っていなかった。その味方が不比等であった。不比等は日本の律令体制を完成させていくとともに、女子天皇家の人々の願望を満ち、同時に自分の一家の永遠の繁栄の基礎を作っていた。持統天皇は無事文武天皇に譲位した。

持統天皇は自らが天武天皇とともに勝ち取った天皇位を無事、我が孫の文武天皇に譲り渡したのである。丁度天照大神が孫の邇邇芸命を豊葦原中つ国に天降りさせるところが『日本書紀』の日本神話の中心であるように、『日本書紀』の歴史時代の最後は、持統天皇が孫の天武天皇に悲願の皇位を譲るところで終わっている。

『日本書紀』は次の言葉で終わる。

（持統11年）八月の乙丑の朔に、天皇、策を禁中に定めて、皇太子（珂瑠）に禪天皇位（くにさ）りたまふ。

不比等は持統天皇の悲願を利用して、律令の改竄をし、日本の律令を持統天皇の皇統を永久化するとともに、権力を太政官に集中し、藤原氏の権力を末永く安泰にした。つまり「養老律令」が制定される養老2年には不比等は実質太政官の権力をわが手に掌握できるに十分な地位であった。

この神話の背景には、天武天皇（大海人皇子）と持統天皇が伊勢神宮を尊崇し、持統2（688）年に式年遷宮として社殿を持たなかった内宮の社殿を造営している（天武2（673）年に伊勢神宮の社殿増設と20年に一度の式年遷宮の制度制定の古伝があり、持統4（690）年に第一回の式年遷宮が行われたという古伝がある）。持統6（692）年に持統天皇は伊勢に行幸している。持統天皇を皇祖神天照大神に比定し、この皇位継承劇を高天原の天孫降臨神話に高めたと言える。

『万葉集』巻二には持統天皇が夢の中で感得したという歌がある。「天皇崩りましし後八年九月九日、奉為の御齋会の夜、夢のうちに習ひ給ふ御歌一首古歌集

明日香の 清御原の宮に 天の下 知らしめしし やすみしし わご大君 高鳴らす 日の皇子
いかさまに 思ほしめせか 神風の 伊勢の国は 沖つ藻も 靡きし波に 潮気のみ 香れる国に
味こり あやにともしき 高照てらす 日の皇子

つまり亡くなった天武天皇が持統天皇に、伊勢の国の神聖さをあらためて教えたのである。梅原猛氏は「この突然の伊勢への旅は、伊勢の大神宮の建設と関係していると思う。そしてまた、天皇家の皇祖神としての天照大神という女神を自分と重ね合わせたも

のかも知れない。天皇を神として見る思想は、天武朝の時より始まった。持統天皇は夫である天武天皇と同じく神となり、そして伊勢の大神宮の祭神は勿論天照大神である。然しそれは持統天皇そのものであると思う」。

猿田彦命の出現と伊勢神宮を伊勢の地に創祀との間に、何か深い係わりがありそうであるが、今のところ資料・文献が残念ながら得られていない。

2. 指令神を高皇産巢霊神とする「正文」に場合

高皇産巢霊神＝藤原不比等、天照大神＝元明天皇、忍穗耳尊＝文武天皇（珂瑠皇子）、
邇邇芸命＝聖武天皇（首皇子）

高皇産巢霊神系神話の成立時期は『古事記』成立の西暦712年と文武天皇が亡くなった西暦707年の間即ち元明朝に収まる。降臨する邇邇芸命は首皇子（不比等の娘宮子の子）で不比等の孫となり、高皇産巢霊神は不比等に比定された皇祖神なのである。これが『書紀』の正文なのである。

珂瑠皇子（後の文武天皇）の母、阿閑皇女（草壁皇子の妃 後の元明天皇）の最大の望みは、持統天皇の次の天皇に珂瑠皇子を就けることである。持統天皇の願いと一致していた。然し持統天皇を中心とする女子天皇家の人々は自分たちで己の願望を成就できるとは思っていなかった。その味方が不比等であった。不比等は日本の律令体制を完成させていくとともに、女子天皇家の人々の願望を満たし、同時に自分の一家の永遠の繁栄の基礎作っていった。持統天皇は無事文武天皇に譲位したことは既に記した。

持統天皇の崩御により二十歳にならない文武天皇とその母、阿閑皇女が残された。後ろ盾を失った彼女の不比等への傾斜は強まった。さらに彼女の予期しなかった文武天皇が25歳で早世した。次の天皇が問題となる。当時首皇子（後の聖武天皇）は7歳である。皇位を継承するには若すぎる。阿閑―不比等の権力を維持するには、皇位を首皇子に継承させる必要があり、祖母の阿閑（元明天皇）が、さらに伯母の氷高皇女（元正天皇）が即位するより仕方がない。異例の即位となる。

不比等の存命中に完成したのは神話だけで聖武天皇（首皇子）の即位は実現していない。

3. 天孫降臨神話と藤原氏

『記紀』の天孫降臨神話を創出したとされる藤原不比等と当時の朝廷（天皇）との係り合いがいかに強かったかを示すものとして、黒作懸佩刀賜与がある。

聖武天皇の皇后光明子（不比等の娘）が東大寺に献納した遺品『東大寺献物帳』遺品目録の中の「黒作懸佩刀一口」である。それに次の様な記述がある。「右は日並皇子（草壁皇子）の常に佩持したまいし所にして、太政大臣（不比等のこと）に賜う。大行天皇（文武天皇）即位の時すなわち献ず。大行天皇崩じたまう時、また大臣に賜う。大臣薨ずる日、さらに後の太上天皇（聖武天皇）に献ず」。即ちこの刀剣は草壁―不比等―文武（珂瑠）―不比等―聖武（皇太子首）と本命の男子天皇に不比等を経由して伝え継がれた。

大山氏は以上の過程からそれぞれの神話の成立時期を次の様に推論している。

神話	皇位継承者	降臨の指令神	神話の成立時期
一書第一（前半）	草壁	天照らす日女の命	持統3年（689）年ころ
一書第一（後半）	文武（珂瑠）	天照大神	持統即位（690）～文武朝
正文	聖武（首）	高皇産巢霊神	元明朝（707～715）

『古事記』は双方を取り入れた折衷型である。

天孫降臨神話は物部一族にも伝承されていた。「高皇産巢霊神が物部氏の遠祖神である饒速日尊を降臨させた」という伝承で『記紀』の邇邇芸命が饒速日尊に変わった以外は伝承の内容は同じであるという。私はこれが天孫降臨の古伝承であると思う。

不比等によって天孫降臨神話は、天武天皇から聖武天皇までの複雑な皇位継承劇を二つの天孫降臨神話に投影して改竄された。二つの神話は藤原氏にとっては氏族の権力維持のために必要なのである。

『日本書紀』一書第一 不比等の権力はまだ不十分で寧ろ持統天皇の意向が強く、柿本人麻呂によって天皇の神化説が出現した。その結果、天照大神（持統天皇）が指令神となって、忍穗耳命である草壁皇子から急遽、天孫邇邇芸命である珂瑠皇子に降臨神が変わるという神話が作られ、同時に天照大神を皇祖神とする万世一系の大和朝廷系譜が生まれた。その中で天兒屋根命を藤原氏の祖神として登場させ藤原氏の系譜も神話の世界である高天原に遡らせた。

『日本書紀』正文 不比等の権力は絶頂に達し、持統系が皇位を継承するためには女性天皇達は不比等の力に頼らざるを得なかった。「一書第一」の神話から一世代下って元明天皇を天照大神に比定し、皇孫首皇子（聖武天皇）を天孫邇邇芸命に見立てて神話を構成している。皇祖となった不比等は指令神高皇産巢霊神として自らを高天原の神に高めた。

神話の成立に頁数を使い過ぎた。この辺で次に進む。

参考資料 日本神話論 三品彰英 日本歴史 23 別巻2 岩波書店

天孫降臨の夢 大山誠一 日本放送出版協会

海人と天皇 梅原猛 小学館

大化改新 岩波講座 二本歴史 古代2 関晃 岩波書店

伊勢・志摩の万葉歌 穂積裕昌 第18回春日井シンポジウム 万葉歌に歴史を読む

藤原不比等 高島正人 日本歴史学会編集 吉川弘文館

ヤマト王権幻視行 熊野・大和・伊勢 桐村英一郎 方丈堂

猿田彦命と天鈿女命

猿田彦命の正体は

この神の正体は諸説が多く正体は掴み辛い。然し猿田彦命は天照大神と同様に伊勢・志摩地方に係わりの深い神であることは確かである。又天照大神と何か係わりがあるらしい。

猿田彦神社、椿大社は勿論であるが、猿田彦が伊勢神宮では興玉神、伏見稲荷では佐田彦大神、多賀大社では猿田彦大神として摂社山田神社に祀られている。

その他日吉山王社では早尾神、熱田神宮では源大夫の名で祀られている。又、春日大社、住吉大社、などでも独自の名前で祀られているという。管見の限りではこれらの神々が猿田彦命と同一神であるか分からない。何れにしてもこの神は非常に異称が多く、祀

られる神社も多い。

猿田彦神社の創立年代不詳であるが、「宇治土公氏が祖神を私邸内に奉仕したものに始まる（『神社辞典』 東京堂出版）という。『神社明細帳』によれば、当社の創立年代は不詳であるが、宇治土公氏が内宮の近くの興玉森に祖神を祀ったことが濫觴であるという（『白水社』日本の神々）。この神の神裔が奉仕する神社だから実質的には全国の猿田彦神社の総本社といえる。

内宮で祀られる興玉神は御垣内西北の隅にあり、猿田彦を祀るとされている。社殿はなく、石畳があるだけ。この石壇は西を向いているという。二見の興玉神を遥拝するここである。因みに天鈿女命の別称と言われている宮比神も興玉神と同様石畳に石神として北向きにご鎮座されている。

『倭姫命世紀』によると、神宮は太田命の提供した土地に建てられたものであり、そこには太田命の斎祀する祖神（私の注 猿田彦 日の神）が既にいて、宇治土公がその末裔というわけである。

冒頭に記したが『古事記』次の様な一文がある。

天の八衢に居て、上は高天原を光し（てらし）、下は葦原中国を光す神、是に有り。

天上・地上をともに照らす神と言え即ち「日の神」と言えよう。

猿田彦命が天孫降臨の後、伊勢の地に帰り鎮座した神は、土着民の信仰する宇治土公の祖先神「日の神」である（後に天武天皇・持統天皇の時、天皇の神格化により皇祖神天照大神が創出される以前）。

内宮と猿田彦神社の創祀について田中卓氏の意見を拙稿の前編『逢坂越磯部道あれこれ（1）』より再引用する。

「伊勢には内宮の創祀以前から宇治の元来からの首長である宇治土公の祖先神である猿田彦大神を祀る社があり、古くから伊勢地方の「日の神」として存在していた。そこへ垂仁紀に大和朝廷の伊勢地方への版図拡大にともなって皇祖神である天照大神が、倭姫命によって宇治の地に祀られることになる。この為この地区における信仰の中心は猿田彦大神から天照大神へと移っていくことになった。皇祖神天照大神を祀る内宮の遷座の絶対年代は3世紀の後半から4世紀の初頭に当たる（私の注 私の推定年代は4世紀前葉）」。

さて猿田彦命は縄文時代から存在する古い神であるが、古代の日本に渡来した外来神であるという。猿田彦命は神武以前の日本古代のウカヤ王朝に渡来し、その時代から活躍した国つ神・出雲神族の最高神であり、祖先神であると古書・古伝の一つ『秀真伝』（出雲神族の神裔の者が編纂した出雲神族のバイブル『秀真伝』の成立は西暦126年である。漢字が伝わる以前。）は伝えている。猿田彦命は数代にわたる神統譜を持つことから、この神の活躍の場は幾つもの時代を通して重層的であり、最も古い猿田彦命は伊勢二見興玉の地に現れ、その後日本各地に進出したと清川理一郎氏はいう。

『宮川夜話草』（安永2（1773）年完成）によると

「興玉の森」は「月読みの森」の南に在、猿田彦大社の旧地なり、五十鈴川の宮地を大神（伊勢の神 内

宮)に献り給い退き給う故、神殿は無して鳥居一基を建てり」と記されている。内宮・外宮・現在の月読神社一帯は猿田彦が古層の地主神であったことが分かる。この地域はもともと猿田彦の神域であったため、わざわざ猿田彦を祀る神殿を建てる必要がなく、鳥居が一つあればそこに猿田彦の神霊が宿る神域そのものであり、それが猿田彦のご神体として崇拜されたと考えられる。

伊勢神宮の神職は有力豪族が世襲制で仕えて来た。内宮は荒木田（中臣氏の後裔）、外宮は渡会、宇治土公は内宮の玉串大内職となる（渡会氏と宇治土公氏はもと磯部氏と呼ばれていた地の氏族である）。玉串職として神裔である宇治土公が「心の心柱」の造立に関わっていた。

これらの一連の物語は出雲の国譲りとよく似ているように思う。国つ神大国主命が出雲の国譲りをした後、出雲大社に閉じ込められ以後、姿を隠したように、猿田彦命も伊勢の国譲りを行ない神殿に祀られることも憚られ、阿耶訶（松阪市）で漁をしていて比良夫貝（ひらぶかい）にその手を食い合わされて、溺れて泡となり消えてしまった。

不比等を中心とした神話の編集者は天孫降臨の功労者である猿田彦命も、国譲りの功労者大国主命と同様に抹殺してしまった。

猿田彦神社は長く宇治土公氏の邸内社として祀られてきた。内宮の祭祀も中臣氏の支配下に入った。

『日本書紀』では猿田彦命の記述は皇孫を高千穂へ送り、自らは五十鈴の川上に戻るという話までである。然し『古事記』にはその後日譚が書かれている。天孫降臨の役を終えた猿田彦命は阿耶訶（松阪市）に居る時、漁をしていて比良夫貝（ひらぶかい）にその手を食い合わされて、溺れて泡となり消えてしまったということである。阿耶訶という地は海から離れた山麓にありこの話には不自然な感がしないでもない。猿田彦命の人物は抹殺されたという暗示ではなかろうか。

更に『古事記』は猿田彦命の死後、天鈿女命は猿田彦命を祀ることなく日向に帰っていると述べている。天鈿女命は天つ神であり、被征服者である国つ神を天つ神が祀るということは、天孫降臨の功労者といえどもあり得なかったのか。日向に帰った天鈿女命はすべての魚（猿田彦命の地盤であった志摩地方の魚を含む）を集めて天つ神の御子に忠誠を誓わせた。これに答えなかった海鼠は口を裂かれたという。猿田彦命から天つ神の御子への忠誠の転換を進めた。これも猿田彦命の抹殺とも思える。

何故『古事記』は猿田彦を死なせてしまったのか。猿田彦命を悪神として死なせてしまうのは、『古事記』に代表される天孫族の手による古来から伝わる伝承の、修史と称する改竄であろうか。

猿田彦命は国つ神の最高神であり、善神であるのは間違いない。阿射賀神社以外の神社は猿田彦を善神として手厚く祀り、命の恩人である（比良夫貝にその手を食い合わされて、溺れて泡となるとき助けた）天鈿女命を相殿神として丁重に祀っている。

関裕二氏は『古事記』には天孫降臨ののち伊勢に向った猿田彦は、伊勢の海で漁をし、比良夫貝に手を挟まれ溺れたという仕草は隼人の服従儀礼そのものであるという。

清川理一郎氏は、猿田彦を悪神として描いたのが『古事記』で、善神と見立てたのが『秀真伝』の記述であるという。悪神として祀る神社は阿射賀神社（倭姫命世紀でも悪神とされている）のみであり、善神として祀る神社と違って、阿射賀神社には相殿に天鈿女命はいない。

『秀真伝』の猿田彦が溺れた時の記述は「猿田彦、阿坂に漁りの時、比良夫貝に噛ま

れ、溺るるを、天鈿女命をして、底着くに、粒立つ泡の、送く処に引き上げさしむ」とある。溺れて死なせてしまった『古事記』とは違う。猿田彦は善神として記述されている。然し、生き返った猿田彦命のその後には述べてははいない。

出雲の国譲りの功労者大国主命や猿田彦命も最後は抹殺され再び『記紀』にも登場しない。天照大神の伊勢鎮座の物語も出雲の大国主命の国譲りと同じようなパターンで語られたのではないかと私は思う。

猿田彦命に関してはその他にも多くの伝承がある。蛇足ながら記して置く。

清川理一郎氏は猿田彦命が渡来人秦氏の族長であるという。渡来人秦氏の源郷は天山山脈の北麓クルジア (kuldia) 弓月 (くんゆえ) であり、此の地に「ヤマトウ (ヘブル語でもアラム語でも神の民)」という地名があった (ヴェンミータ美子氏が確認)。このことから、ユダヤ人 J・アイデルバーク氏は日本をヤマトというのは秦氏が持ち込んだという。

この近くに「ハン・テングリ山 (khan tengui)」と呼ばれる天山山脈に高い山がある。「ハン」は族長の称号「テングリ」は天神のことという。日本語の天狗に通じる。

天狗達が付けている兜巾 (ときん 密教の山伏も付けている) はユダヤ人が着けるフラクリティ (ユダヤ人の象徴) と同じである。猿田彦は日本の民族神の中では天狗に喩えられる所以であり、ハン・テングリ山は猿田彦 (族長) の源郷であるという。

猿田彦は天狗の祖形だ。天狗は胡人ペルシア系統の異人だ。猿田彦命を祖とする秦氏が創設した稲荷大社は宇迦之御魂大神 (うかのみたまのおおかみ) を主祭神とし、佐田彦大神 (猿田彦命)、太宮能売大神 (オオミヤメオオカミ)、田中大神、四大神 (しのおおかみ) を配祀して、五柱の神として秦氏最高の氏神で現在でも秦氏の荷田氏が祀っている。猿田彦命が稲荷大社の主神三座の一つとしてそして唯一明確な人格神とされていることから、秦氏の祖先神・民族神であるという説である。

猿田彦命が秦氏の族神だったのではないかと思わせる証拠として、伊勢神宮内宮と猿田彦神社の二社がゾロアスター教の聖方向に並ぶという。

伊勢神宮内宮の北北西二キロ弱のところに猿田彦神社が鎮座する。これと内宮を結ぶと正確に真北から二〇度西に傾いている。しかもこの延長線上北二五キロ弱に椿大神社があり主神は猿田彦命だ。つまり伊勢神宮・猿田彦神社・椿大社はゾロアスター神殿であるという。

ゾロアスター教は奈良時代以前に我が国に伝来されたいいが明確な遺跡は残っていない。これは比較的早くゾロアスター色を失い土着信仰と習合した気配が濃厚である。土着信仰は祭礼儀式の一部を取り入れながら、信仰の対象の祖霊を守った。それが大物主であり猿田彦命もそうであったかもしれない。

伊勢神宮も猿田彦神社も特に取り立ててゾロアスター神殿であるとは言えないのではないか。それらしきことを唱えて銭儲けをたくらむ人達—例えば御成街道に立ち並ぶ石灯籠など—は許せないと思う。

参考資料 サルタヒコ考 猿田彦信仰の展開 飯田道夫 臨川書店

逢坂越磯部道あれこれ (1) 大屋行正

猿田彦と秦氏の謎 清川理一郎 彩流社

天孫降臨の謎 関裕二 PHP 研究所

何故猿田彦は天孫降臨神話に登場したのか―塞神との習合

猿田彦命が天孫降臨の際に道案内をしたという物語は、道俣神（みちまたのかみ 塞の神）の信仰・伝承によるものと思う。

『古事記』によると火の神の迦具土神を生む時に死んだ伊邪那美命を追って、夫である伊邪那岐命が黄泉国へ行ったが、その死体を見て驚き恐れをなして逃げ帰ってきてしまった。

そして「穢い国」に行ってきたので、身を清めるために禊をしよう」と、筑紫日向の橘小門の阿波岐原で禊祓をした。禊のために、身につけている物（杖、帯、袋、衣、袴など）を投げ出すとそれが神となった。その時、投げ捨てた御袴が道俣神になった。

ここでいう袴は下袴の事で、今で言う褌に当たる。袋（上袴）の下にはくもので股が二つに分かれている。道俣神はその下袴から連想された神であるが、二股に分かれる道の意味でもある。

陰暦6月15日に、京都で邪気の入らぬよう都の四方の路上に供物をする道饗祭の祝詞の中で、禍を塞ぐ神としてうたわれている久那土（くなど）神、この久那土神は道祖神に擬せられ、八衢比古、八衢比売、久那土の三神を道祖神と崇め、この三神と共に道を守る神として信仰された。八衢は八方に分かれる。即ち多く分かれる道を意味し、道俣神、道祖神、道陸神（どうろくじん）、塞神（さえのかみ、さいのかみ）、岐神（くなどのかみ）などは同意語といえる。

この神は、『日本書紀』や『古語拾遺』では猿田彦命と同一神としている。塞神は、日本の原始信仰において、疫病・災害などをもたらす悪神・悪霊が農耕聚落に入るのを防ぐとされる神である。又、「岐」または「辻」とは、道路が分岐・交叉する場所のことである。このような場所は、人だけでなく神も往来する場所と考えられた。神の中には悪神・悪霊もあり、これらの侵入を防ぐために祀られたのが塞神、即ち猿田彦命である。

猿田彦命の神性は防御・辟邪である。天照大神が伊勢に祀られることになったとき、土地の神である猿田彦命を守護神としており、これが神話に仕立てたものであろう。

要するに、天孫降臨に猿田彦命が登場するのは皇孫が高貴な神であることを強調する演出であろう。

参考資料 サルタヒコ考 猿田彦信仰の展開 飯田道夫 臨川書店

天孫降臨の謎 関裕二 PHP 研究所

渡辺豊和建築工房 WEB

猿田彦命と天鈿女命の関係

猿田彦命と天鈿女命と結婚し、天鈿女命が猿女君となったと伝えられているのは、『日本書紀』に、「天鈿女命は胸乳を露わにし裳帯（もひも）を臍の下に垂らした」とあるのでこの記述が、性的な所作をもって相對したと考えられる為、神話には書かれていないが、このことから、二神が結婚したとされたものという伝承が生まれたと考えられる

という（天の岩戸神話には猿田彦命は登場しないが）。

天鈿女命を猿女君の遠祖であると神話の作者は考え、猿女の「猿」は猿田彦命の「猿」を由来とすることにより、猿田彦命と天鈿女命とを関係付けたと思う。天鈿女命と猿田彦命は共に強調しあっている。

天孫降臨神話では降臨に先立ち猿田彦の正体を天鈿女命が見顯わしたと記述されている。

稗田阿礼（古事記編纂者の一人）は天鈿女命の後裔であると平田篤胤はいう。平田篤胤の「古史徴」（どう言う趣旨の文書であるかを調べていない）に「阿礼は天鈿女命後也」とあるという。猿女君の一族が大和郡山市の稗田に稗田姓を名乗り住んでいる。この一族が阿礼であると篤胤はいう。

太安麻呂（『記紀』編纂者の一人）は多臣品治の子であり、太氏は神武天皇の御子、神八井耳命（かむやいのみみ）の出といわれる、この神を祀る「多神社」が大和の田原本町にある。太（多）氏は和迹一族である可能性が高い。皇室神楽の継承者に多氏がいる。この楽家の多氏と太安麻呂とは縁戚に当たるのであろう。楽家の多氏と、神楽を舞う猿女は一体である。

安麻呂にも猿女、引いてはその祖天鈿女命を引き立てたい気持ちはあった筈で、阿礼の願望と一致する。

安麻呂の父の多臣品治に近い中臣連大嶋は神祇官の長官である。神祇官は伊勢神宮を管轄下に置く役所である。彼も伊勢の神である猿田彦命を守り立てることに積極的であった筈で異説「天孫降臨譚」に賛同した。

異本「天孫降臨譚」は猿女が天鈿女命の末裔であることを説いたもので、猿女の君の伝承であり、その業績の吹聴であることは間違いない。伊勢の神である猿田彦命が案内を務めたから、その縁で後年天照大神が伊勢に祀られることになったことを暗に示している。これが『記紀』にとりいれられた。

猿田彦命或いは猿女の「猿」とはどのような存在であったのか。

猿舞は内裏と伊勢神宮の正月行事であった。神宮の猿舞の猿回しをしたのは秦氏だったという。猿舞の発祥の地は伊勢と考えられ、この地は猿田彦には由緒の深い地である。伊勢の地を流れる宮川の上流に、猿回しが住んだところと思われる「猿飼」という部落（地図上では確認できない）がある。近くに滝原宮がある。猿舞はもともとこの宮で行われていた。

日吉山の神使とされる動物として有名なのが猿である。日吉大社と猿の関係については、はっきりいってよく分かっていない。ただ、日本では古くから、山にすむ猿を山の神の化身であるとする素朴な信仰が各地にあり、日吉大社の周辺の猿もそういうふうと考えられていたようである。おそらくは原始信仰の名残りではないかと推測されている。

日吉神社の神使は「神猿」と書いて「まさる」という。「まさる」は「魔が去る」または「勝る」の意で魔よけ等の御神徳があると言われている。

猿舞が宮中や伊勢神宮の行事になっていたのも、古代信仰の影響を受けており、猿田彦命は「魔よけの猿」「道祖神 塞神」が習合して神性が高められていった。

参考資料 秦氏の研究 大和岩男 大和書房

サルタヒコ考 猿田彦信仰の展開 飯田道夫 臨川書店

猿田彦命は天狗として神話には登場していない

前項で塞神は、日本の原始信仰において、疫病・災害などをもたらす悪神・悪霊が農耕聚落に入るのを防ぐとされる神である。又、「岐」または「辻」とは、道路が分岐・交叉する場所のことである。このような場所は、人だけでなく神も往来する場所と考えられた。神の中には悪神・悪霊もあり、これらの侵入を防ぐために祀られたのが塞神、即ち猿田彦命であると記した。

仁王像は寺院の南門に建てられ御本尊の警護をしている。武具をつけ鋭い眼光で睨みつけられれば悪神・悪霊も近寄り難い。

現在、猿田彦命と天狗が『記紀』編纂時に習合していたかのように言われているが果たしてそうであろうか。

天狗の初見は『日本書紀』舒明天皇9（637）年条である。即ち、

二月丙辰の朔、戊寅大きな星東より西に流る。便ち（すなわち）音ありて雷に似たり。時の人曰く「流星の音なり」という。亦曰く「地の雷なり」という。是に僧旻僧（みんほうし）が曰く「流星に非ず、是天狗（あまのきつね）なり、その吠ゆる声雷ににるのみ」と。

天狗の正体については『日本書紀』でも具体的な姿は不詳である。事実天狗の正体は古くから色々なわれているがよく分からない。松谷みよ子女史も次のようにいう。

1. 天然現象である。天狗笑、天狗の花火、天狗の木倒しなどといわれる、妙な調べ、しわがれた笑声、大木の倒れる音、すざましい風、怪しい火の玉など耳には聞こえ目には見えるが正体が定かでない現象のこと。
2. 清浄な場をいう。天狗の角力場、垢離場、深山に誰ともなく作ったとしか思われぬ畑、風の仕業がいつも掃き清めたような清浄な場所といわれる。天狗の伝承と共に近寄り難い場所のこと。
3. 古い木や姿の良い木には神が寄りつき、天狗の木は腰かけやすい木いう。この様な天狗の木を伐ろうとして祟りをうける。
4. 山人（仙人？）という山で生活する者のこと。普通の農民とは異なるだけに、村人達は恐れを抱いた。先住民族（縄文人）と思っていたのかも知れない。

以上のことを体験した者として、魔界の現象として天狗の仕業として信じ、そして恐れた。初期の天狗は不思議な現象や近寄りたがたい不思議な場所や人達というように何となく恐ろしい存在であったという。つまり天狗の正体を誰も見てはいない。

『日本書紀』の天狗観は姿のない天然現象として捉えられているが、成立が平安期前期といわれる著者不明の『先代旧事本記』（偽書という説もある）に具象化された天狗像が記されている。『記紀』より百年ほど後に成立した史書である。それが江戸期切っの天狗研究者諦忍の書『天狗名義考』に引用されているという（知切光義氏）。即ち、

服佐雄尊（すさのおのみこと）猛気胸腹二満テ、余り吐物ト化リテ、**天狗神**（あまのざこがみ）ト成

ル。姫神ニシテ威強シ。其ノ軀ハ人身ニシテ、頭ハ獣ノ首（かしら）ニシテ、鼻長ク、耳長ク、牙長キ獣ニシテ、太ダ（はなはだ）怒リ甚ダ荒ル。大力神ト雖モ乃チ鼻ニ懸ケテ千里ニ投グ。強ク堅キ刀戈ト雖モ、輒（たやす）ク咋（か）ンデ牙ニ掛ケテ碎イテ段々（ずたずた）ニ作ス。事毎ニ出イ知リテ穩ヤカニ止ム事ナシ。天道姫命ト名ヅク。天ノ逆氣ヲ吞ミテ、独リ身（はら）ンデ児ヲ生ム。天魔雄命（あまのざこおみこと）ト名ヅク。天地ノ間ニ生リ出タル荒神（あらぶるかみ）、逆神（さかふるかみ）、知増人祇（ちにますひとのかみ）、吟鬼（さまようかみ）等皆天魔雄命ニ属テ君トシ事ウ。諸ノ弱神ヲ馳リテ、愚カナル者ヲ迷ワシ、災悩（わざわい）ヲ起シ、神師（ひじり）ヲ謗リ、仙客（かしこき）ヲ誹リ、天尊ノ命（あまのみこと）命ニ順ワズ、諸事ノ造為順善（ころわざよきしな）ヲ作サズ。八百万神悉クニ絶方便（もてあつかう）。天照大神ト諸神衆ト除祓シテ祭リタマウ。

『記紀』には神々の吐瀉物から新しい神が生まれたという話は多い。『記紀』には記されていないが、『天狗名義考』では天道姫命は乱行の為高天原から追放された素戔男命の吐瀉物から生まれたとされている。天狗神の出自はあまりよくない。姫神でありながら長鼻・長耳・長牙の異様な風貌に加えて、事ごとに騒動を大きくし、また子の天魔雄命は人々を惑わし良い所は何もなく、天照大神をはじめ八百万の神々から風貌の良くない厄介者の大悪神である天狗の元祖であると紹介されている。



時代とともに天狗像は変わっていくが、後世のことはさて置き『記紀』の時代に天狗は長鼻・長耳・長牙の風貌の良くない大悪神であり天照大神からも厄介者とされたという伝承があったことを示唆している。然し、天孫降臨の神話の編纂者はこのような悪神のイメージで猿田彦命を創出したとは思えない。

天狗の初見は西暦7世紀舒明期であるが、『日本書紀』天孫降臨の条の一書第一に猿田彦命の風貌について次のように記述されている。即ち、

……先驅者（さきばらひ）還りて白さく「一神あり。天八達之衢に居り。其の鼻の長さ七咫（あた 約18cm 7咫は長い意）、背（そびら 座高）の長さ七尺余り。七尋（ひろ 身長の意味）と言うべし。且、口・尻、明耀（あかりて）れり。眼は八咫鏡の如くにして、絶然（てりかがやけること 絶、赤也）赤酸醬（あかがち 赤いお酢）に似れり」とまをす。

即ち従神（みとものかみ）を遣して往きて問はしむ。時に八十万神有り。皆目勝ちて（巨神の眼力が強く従神衆は皆圧倒される）相問ふこと得ず。故、特に天鈿女に勅して曰く『汝は是目の人に勝ちたる者（眼力人が人よりすぐれ、対決する神と面と向かって勝つ神）なり。往きて問ふべし』とのたまふ。……

『日本書紀』の天孫降臨の条の猿田彦命の風貌表現が現在に伝わる天狗像（上の図）に似ている。

然し、天狗像が我々の知る鼻高の行者姿に何時からなっていっただかは定かではない。天狗研究者の知切光蔵氏は、絵師狩野元信（室町後期 1476～1559年）の描いた「鞍馬大僧正坊図」が、それまでの烏天狗から脱却して威厳に満ちた大天狗像に変身させた初めての作品であり、以来、この大天狗像が諸山に広がり鼻の高い現在の天狗像として定着したという。

以上のことから私は猿田彦命が天狗に比定されるようになったのは、近世に入ってから

らではないかと思う。『記紀』の編集者は寺院の山門の仁王像のように邪神を寄せ付けない強い神として猿田彦命を描いたのではないか。

参考資料 日本書記 新編日本古典文学全集 小学館

河童・天狗・神かくし 現代民話考 松谷みよ子 立風書房

天狗の研究 知切光歳 原書房

逢坂峠の天狗伝説

我が逢坂峠にも深い山特有の天狗伝説が残っている。

『伊勢志摩逢坂越え覚書』（中村精武）に「北の河内、カヤノ木原異聞」という記述がある。天狗の住む森という伝説のある所である。私の知識ではこの地を特定することはいけないが、峠の南斜面を下る古道の周辺「御池」であると志摩市文化財調査委員の助田時夫氏から教えられた。先ずその記述を引用する。

カヤノ木原異聞（逢坂越え）

逢坂山南麓の東は広い谷である。もと旧道は、この谷を覗き見ながら山腹を大廻りに廻っていた。このすり鉢のような谷の西側は、アザ北ノ河内、東側をアザ泉河内という。そしてその間は杉の林であり、附近は石灰岩の採石場であった。北ノ河内の上はアザ高天原という壮大な地名を誇っている。その中腹に2町余りの榎ノ木原（かやのきはら）がある。榎の木の原生林があり、昼も暗い森の中から水がコンコンと流れ出ている。秋も深くなるころは、鹿が鳴いた。里の子はこの森にカヤの実を拾いに行った。だがここは恐ろしい魔所であった。森の上の方でヒューと鳴ると、何処からともなくデーン、デーンと太鼓の音が響いてくる。子供達はヒューデンデンが来ると算を乱して逃げ帰る。小字名にも「高天原テンテン」という得体の知れぬ名が付いている。ヒューデンデンはこの森に棲む天狗の仕業という。この森に天狗が棲んでいて、今も峰のあたりに残る一本の大松を、天狗松と呼んでいる。昔、この界隈は天狗の縄張りのものであった。天狗松といわれる松は松尾（鳥羽市）大王崎の突端にもあった。五ヶ所街道の西の神路山山中に「碁盤石」がある。平らな石の面にかすかな目盛が見え、天狗が碁を打った所だと言う。

鶴方の官山でもヒュードンドがいた。里の小童椎の実を採りに入る。帰りが遅くなるとヒュードンドにさらわれるという。森の木々がヒューヒュー鳴って、魔物が出そう気配の時は、はいている草履を頭の上にかざして走り帰ると、難を免れるといわれた。

また、谷広氏（元磯部教育長）は『逢坂峠と私』の中でこんな話を書いている。

- ・ある男が、天の岩戸の風穴に入ったところが、神隠しにされて、三日三晩外に出てくることが出来なかった。
- ・天の岩戸の前で、「こんな穴がなんだい」と悪口を言ったところ、天狗にえり首をつかまえられて、大杉のテッペンへ放りあげられた。

鞍馬山など他の山の天狗には名前があるが、逢坂峠の天狗には名前がなさそうである。

大叔母「岩崎よし」

本章を学習するに当たって

『逢坂越磯部道あれこれ（１）』に引き続いて『逢坂越磯部道あれこれ（２）』の学習を行う目的は私の幼い記憶に残る大叔母「岩崎よし」のことをもう少し知りたいということであった。これは幼くして失った亡き父への追憶かも知れない。

『伊勢志摩逢坂越え覚書』の要約（抜粋）

本稿も前稿に倣って『伊勢志摩逢坂越え覚書』の要約（抜粋）から始める。

茶屋の起り

逢坂街道の茶屋は、恵利原から宇治まで、前後を通じて１７、８軒でなかったと思う。これらは街道そのものの道筋の更改などで、いくたびか起伏があり、興亡と浮沈ののち、昭和期に入って全部廃滅した。

『志陽略誌』（正徳三年 1713）に「一軒茶屋、在逢坂旅客干（もとむ）茲」とある。高山彦九郎の『甲午春旅』、『伊勢参宮名所図会』にも、「家立茶屋」は出ているが、他の茶屋の記載はない。この一軒茶屋は「家立茶屋」のこととして大過なく、15世紀末から16世紀初頭には存在していたと見なければならぬ。明治の前に創められたのは、『越賀村年内之行事記』（天明4年 1784 書写之 天保9年 1838）の記述から家立茶屋を別とすれば、天明4年には杉坂茶屋、笹原茶屋、新茶屋となる。想察するに杉坂、笹原の茶屋は安永から文化文政（西暦 1772～1829 年）の40余年の間に創められたものであろう。あたかもこの時期は、全国的に見れば、辺境騒然とし先憂の士が東奔西走をはじめ、旅行のための旅行もようやく盛んになってきた時期である。こういう世情にならなければ、辺地の逢坂街道などに茶屋の必要は生まれない。

場 所	茶屋名	開業／廃業	目 印	その他記事
恵利原	田中茶屋	明１０頃／明４０頃	大正橋西詰め	支度・旅館
	ほうぼう茶屋	明３３以前／大初期	祓戸の附近	支度・旅館
板 橋	直助茶屋	明２９／昭１０頃		
	高茶屋（お里茶屋）	明２９／大１０頃		支度
	新茶屋	天明４以前／明２１頃	築地道の岐路	
日向郷	久助茶屋			支度
	日向郷茶屋			
峠南麓	七茶屋	明２９頃／昭１０頃？	旧道の登り口	別名 またくら茶屋
	家立茶屋	正徳３以前／明４１		支度・旅館 （一軒茶屋）
峠	島見茶屋	明３５／昭５頃		
	おえい茶屋	／明３０頃	国境の頂上	
	峠の茶屋	明２５頃／昭２１		庄太郎茶屋・およし茶屋

北 麓	坂下茶屋	大正前期10年間位		
笹 原	笹原茶屋	天明4以前／		
杉 坂	杉坂茶屋	天明4以前／	天狗橋の袂	
鳴ヶ滝	水呑茶屋			
	オンベ茶屋			

磯辺町史も参考にした。 網掛した茶屋は古道時代から存在した。

峠の茶屋

(本稿の主人公「岩崎よし」が経営した茶屋であるので、詳しく引用する。)

埃っぽい敷居を跨ぐと、間口に沿うた細長く赤土を叩きかためた土間、それが右側の台所まで続き、奥にはほのくらしい中に茶釜が光っていた。左側土間の端の巽(南東)の柱にはワラジ草履がぶら下がり、その表口に縁台を置いて、車曳き連中が汗をふいていた。

土間に沿った上がり間には、おきまりのガラス蓋の駄菓子箱を並べ、裏でその支えとなる狭い台には招き猫が置かれてある。この台の横には、ラムネ、みかん水が7、8本、その空瓶とともに立っていた。

店の間の奥は居間のようにであった。それを区切って黒い骨太の障子のはまり、その表に、木版一枚刷りの大きな暦や、古市の芝居のビラなどが貼られてあった。

茶屋の上手は、家の奥まで続く孟宗藪、すぐ伊勢への下り坂に続き低い杉の木立が並んで、その側を七曲りのぬけ道が岐かれていた。

大正の終わり頃、あめ玉、棒菓子、むし菓子などで1銭から2銭、草履は1銭、わらじは1銭5厘だったという。

峠の茶屋は馬も知っていた。荷馬車を曳いて車の前に腰掛けて、うつらうつらと伊勢の夢、志摩の夢を見ていても、峠の茶屋の前まで来ると馬は独断でピタリと止まった。茲で水やはご(かみはご)を貰う例になっていたからである(この話ほどの街道物語にも出てくる)。

峠の茶屋は明治の中頃、迫間の人「岩崎庄太郎」が開いた。庄太郎の死後妹の「およし」が後を継いだ。だからこの茶屋を古い人は「庄太郎茶屋」、後の人は「およしの茶屋」とも呼んだ。のちに「およし」は茶屋をやめ、その後もここに頑張っていたが、敗戦後とうとう峠の茶屋を棄てて山を下りた。これらのいきさつは題を改めて述べる。

昭和41(1966)年夏、私(中村氏)はひとり峠に上った。かつての茶屋の跡には夏草が生茂り、野菊がまばらに咲きはじめている。そしてその間に、いくつかの石灰石の礎石が、白々とどくろのように散っていた。道を隔てた前の畑地も荒れるにまかせてあったが、梨・栗・桑などの古木が、枯れたシュロとともに残っていた。柿の木にはそこばくの実が赤くなっていたが、採る人もなく山の鳥に啄ばまれるばかりであろう。

茶屋の女あるじがここを去ったのは敗戦の翌年であった。その後人棲まぬその家は、柱が傾き壁が落ち、山の霧の出入にまかせてあったが、これを取り壊すこととなり、神宮から、かつての住みでの縁先へ連絡したが、誰一人立会に来なかったという。

かつての人間のすみかに人の影の見えぬのはわびしい。それも、屋根が落ち柱が朽ちた廃家が残っているのは、ただただ凄惨の思いが先に立ち、もろもろの情感が凍ってしまう。それに引きかえ、人の生活の痕跡はすべて滅び去り、わずかに礎などが夏草の中に埋没しているのは限りなく想いがひろがって、しみじみと心を打つものがある。

鶯が鳴いた。山が高いせいか、老鶯というには声が冴えていた。最後の女あるじ「およし」の姿が私(中村氏)の心の隅をかすめた(私の注 長年住みなれた家を棄てて山を下りた身寄りのない「およし」を偲ぶ中

村氏の心情に感動した)。

麓の茶屋

麓の茶屋は逢坂山の南麓にあった。県道が通じて間もなく明治29(1896)年に、恵利原の森田楠七がはじめた。七茶屋と呼ぶ人が多い。逢坂山の裾を、まっすぐに天の岩戸につづく古道から、平地に別れて山道にかかる曲角に、この茶屋はあった(現在はダムに水没した)。(旧道の)山にかかる前の息安めの位置にあったので、カチニモチや飛脚などよく一息入れて、コアゲ(小揚子 後押人夫)の手配をした。ここで待機しているコアゲの常連もいた。

家立の茶屋

何時出現したとも知れぬ逢坂の古道で長い年月ただ一つ存在した家屋であったことはたしかである。

ここは逢坂山の古い登り口である。新道(私の注 明治の新道 いわゆる現在の旧道)が曲って山に登りはじめるところを曲らずに、頑固にまっすぐ歩いて突き当りの山の裾である。ここからまた山の裾を廻った一つ奥の谷に、いわゆる天の岩戸がある。茶屋の跡地は石垣で築き上げた一郭の平地になっている。その入口右側にビランの古株が朽ち果てた棒杭のように立ち、それでも根元から勢いよく芽を出して、この古木のシンの強さが何かを象徴しているようである。このビランの木は伊勢参宮名所図絵(寛政9年 1797)に画かれており、『伊勢参宮春の賑』(慶応4年 1868)には70年の樹齢を経たビランの木が画かれている。どちらの絵図にも旅人やカチニモチなどが画かれている。

明治28(1895)年頃には茶屋をしながら谷の奥の田2町余り(約20反、20ha)を作っていたという。

又この頃この茶屋の亭主の一番の仕事は天の岩戸の参宮道者の案内をすることであった。茶屋で岩戸参りの支度をして岩戸に向った。

島見茶屋から峠の茶屋に向う道は家立茶屋から上がる古道を上がり切ったあたりで大きく曲がり、北に向かうあたりが切り通しになっているが、これは明治の新道を拓く時毎日クロクワ百人も使って百尺も切り下げたもので、それまでは道の東の頂上を越えて峠の茶屋に下りた。この頂上におえいの茶屋があった。新道が出来て下の切り通しを通るようになってから、頂上に取り残された形になりすぐ廃業した。

田中茶屋・日向郷茶屋・久助茶屋は省略

島見茶屋

峠の茶屋(およし茶屋)より南へ、爪先上がりに切り通しをぬけると、道の右手に朽ちかけた鳥居が立っている。鳥居をくぐれば古道につづく。そのあたりから東南への一帯の谷が大沢森と呼ばれる宮域林で、椎などの老木が曲がりくねった枝をさし違えている。

そのあたりの日だまりに島見茶屋があった。茶屋の跡は今杉山になっている。風裏で、北西の季節風の強い秋冬の候でも、ウバガフトコロ(姥ヶ懐)のようにあたたかい。峠の茶屋は伊勢地内だが、ここは志摩地内で、この間が伊勢志摩の国境になっている。一般に国境——分水嶺の頂端は風の吹きさらしで、茶屋の立地として好ましくない。一歩下がった風陰で眺めのきく位置が好都合である。島見茶屋は恵利原の人、道坂楠松が明治30(1897)年にこの地に移転して創めた。大正3(1914)年51才で死んだ後、妻おしょうが茶屋をつづけていたが昭和7(1932)年に死んだ。

おえいの茶屋

家立の茶屋から、まっすぐに上る古道と、峠道を大曲する明治の旧道とは峠で交差する。この地点から右の植林を過ぎると島見茶屋、左の切り通しを抜けると「およしの茶屋」、ともに200mほどの位置にある。

古道はそのどちらも曲らず、真直ぐに山に攀じ登った。その上りつめが分水嶺で、伊勢志摩の国境である。『伊勢参宮名所図会』に、地藏堂ありと記されたのはここである。その傍らに小さな茶屋があった。おえいの茶屋である。県道が通じ、下の切り通しを通ることになって、この茶屋は頂上にひとり取り残された形になりすぐ廃業した。

およし一代

この項は私にとって最も関心のあるところである。中村氏も紙面六頁にわたり詳しく書き綴っている。よくぞここまでと舌を巻くばかりである。然し若干私と見解を異にするところもあり、詳しくは項を改めたい。

取り敢えず中村氏の著書の概要を以下に引用する。

「峠の茶屋」を古い人は「庄太茶屋」、後の人は「およしの茶屋」と呼んだ。ともに経営者の名を呼んだのである。岩崎庄太郎は磯部村迫間、治右エ門の長男として嘉永3（1850）年に生まれた。一時恵利原にいらしいが、当時のことは何もわかっていない。

庄太郎が峠に上ったのはいつか、確かなことはわからぬ。古い戸籍によると、彼は明治23（1890）年41才で迫間から宇治山田町館町のこの峠の地に移籍している。

庄太郎は春の茶の時期には茶を揉むことも出来た。「峠の茶屋」には道を隔てて茶部屋（製茶室）もあった。そしてその周囲の空地畑にも茶はうえられていたろうが、前の山の谷には少々まとまった茶畑があった。庄太郎は明治35（1902）年逢坂山で死んだ。後妻こさいは二年前一女を生んですぐ死んだ。弟良助の子として入籍した。後の浜島鯨望荘の女将おりょうさんである。

「およし」は庄太郎の妹である。明治5（1872）年迫間で生まれた。幼いころからきょうがよく愛くるしかったのであろう。築地の北村某（あるいは中川某ともいう）の世話になり、伊勢の古市で針仕事などをおぼえて来た。そして上之郷世古邸の隠居の一棟で、5、6人の針子を置いて仕立物で口ずかしていた。北村がおよしと疎遠になったのは別の女の関係からだという。

その後「およし」は上之郷の旅館吉角で手伝いだしていた。その時、沓掛の広野伊三郎と深くってしまった。「およし」は背がすらりとした面長、色白のきょうよしであった。赤いサンゴのかんざしのよく似合う明治型の美人であったという人もある。それに愛嬌があつて親切できつぷがよかった。そういう「およし」だから、人に好かれもしたが、また人を好きもした。

明治35年、峠の茶屋の庄太郎が死んだ。そこで「およし」は兄の跡を守ろうと峠に上った。三十を過ぎたころである。よくも女の身でと思われるが、陰に広野があつたからであろう。

「およし」に選ばれた男は、御存知の2、3人に限らなかったが、みな凡そきまつた風格があつた。人品卑しからず、弁舌さわやかで、他から立てられる男前、いわば田舎紳士というに尽きるかと思う。広野も色白のひきしまった顔立ちで、あまり大男ではなかったが、チョビひげなど置いて、いかにも頼もしげな男ぶりであつたという。

昭和6（1931）年広野は沓掛の区長に推された。区長が管下を遠く離れて情人のもとにあることは、世間への聞こえもどうかと、親戚の口がうるさく、さすがの彼も我執をまげて「およし」と手を切った。

広野は昭和13（1938）年に永眠した。

「およし」は広野と別れてからもひとり「峠の茶屋」を守った。昭和14（1939）年長年籍を置いていた浜島のおりょうさんの家から、「峠の茶屋」に籍を移した。「およし」は68才になっていた。30年に及ぶ広野との交わりが途切れてからも、もう8年になる。この期に及んで突然けうとき（ママ）山中に分家を思い立ったのか。

「およし」には、たとい別れているにせよ、広野が遠くもない里に現存しているということが心の支えになっていた。世間がどう言おうと、広野は別れた今も自分ひとりのものと信じこんでいた。広野が死んだ。それは老いたつれあいのどちらかが当然受くべき命運である。いまさら悲しみ嘆き、とりみだす年でもない。そこまでは素直にうけとった。ところが1年もたたずに、ありとしも思わなかった本妻が、杖柱と頼む夫に先立たれ、生き甲斐を失って後を慕ったとも、また亡夫が老妻をいとおしんで呼び寄せたとも思われた。「およし」がこう思った時、亡き二人の絆が急に太く強いものであったと思われる、自分の立場が音をたてて崩れ去って行くのを感じた。自分の30年の来し方が自分でから嫌（ママ）でたまらなくなった。そうだ出家遁世のつもりでこの逢坂に骨を埋めよう。そしてあらためて逢坂を終生の地と心に決めた。そういう心境になったのではないか。

戦時中このあたり兵隊が屯していて、「およし」は頼まれてよく食事の世話をした。戦後は伊勢の朝熊あたりから、山仕・炭焼が入りこんだが八方破れのおよしは、せがまれてそういう山人に宿を貸すことも多かった。もう「およし」は枯れきった70才。旅人に宿を貸す荒れ寺の老尼の心境であつたろう。

昭和21（1946）年、「およし」は75才になった。その年、峠の家を捨てて迫子に移った。姪の姻戚和田一郎氏を頼って来たのである。和田氏は伊勢への途次、よく峠の茶屋に憩んで前から顔見知りであった。「およし」は一時は逢坂を終生の地と心に決めたものの、戦中戦後の世情は世を捨てた老婆の安閑生きていけるような生易しいものではなかった。「およし」が身の行く末を案じているのを、和田氏は見かねて、引き取った。迫子に移ってから、「およし」は年では老醜というに近かったが、見にしみたあだっぽさがほんのりと残り、“残艶”という風情をただよわせていた。さすがに耳は遠くなっていた。迫子に来て6年、20日ほどの臥床のすえ、昭和26（1951）年波瀾の多い一生を閉じた。呑湖院に「寒月智芳禅女 行年七十九才」の墓石の下に眠っている。

「およし」を知っている人は少なくないが、その誰もが、美しい顔立ちで気立てのよい人であつたと話した。思い越して顔をしかめる人は一人もなかった。その質も名と相通じたのである。「およし」のような型の女は、もう志摩からは出ないであろう。しょせん明治の女であつた。

私と「岩崎よし」との間柄

「岩崎よし（峠のバーちゃん）」の思い出

幼い時に離れてから70年近くも経つと記憶の下積みとなってしまうている。彼女の名前も危うく失念してしまっていた。『伊勢街道 朝熊岳道・二見道・磯部道・青峰道・鳥羽道』（三重県教育委員会）の「磯部道の現状」の中に「およし茶屋」についての記述を見て、忽ち私の記憶が蘇ってきた。「およし即ち岩崎よし」——彼女に迫る切っ掛けが生まれた。

私が「岩崎よし」と出会ったのは、昭和13～20（1938～1945）年頃であろう。私が7才から14才位である。其の時の「岩崎よし」は生年から数えると66～73才の

年代であり彼女にとっては晩年期にあたる。当時、私には彼女がそのような高齢であったとは想像も出来ない程元気で若々しい人であると思えた。母が言っていたように小粋な人で、幼心の私にとっても老いても尚清楚で細身の人であった。そして目も耳も達者でその上抜群の健脚家であり、しばしば逢坂峠から宇治を經由して伊勢市船江の我が家まで籐の乳母車（？）を押して訪れていた。その都度3～4泊していったらうか、絶えず子猫のように喉を鳴らせ目を細めて、ニコニコと幸せ一杯という笑顔は今も私の脳裏に残る。母も大切にお迎えしていたようだ。

私は彼女から可愛がられていたのだろう。巾着の紐を緩めて銭を取り出して何かを買ってもらった。それが幼い時の私の脳裏に潜在的に刷り込まれたためか、70年近く経た今でも忘れ得ぬ人になっているのかもしれない。

幼い私は父や兄と旧道伊勢道（明治の改修道）を宇治から逢坂峠まで歩いて登ったことがある。何処からこの道に入ったのかなどの詳しい事は覚えていない。多分赤福本店から橋を渡って磯部街道に入ったであろう。蝸（ひぐらし）の声を聞き、山蛭が頭上から糸を引いて下りてくる中を島路川を左手にしてひたすらに歩いたことを覚えている。ある時は鬱蒼とした木々のトンネルをくぐり、又ある時は稲の穂が垂れた田圃の脇を通り、赤とんぼが飛んでいたことを断片的に覚えている。神宮林の中に田圃があったというのは私の記憶違いかと思っていたが、前項の中村氏の資料にも田圃の記述があり、又大正9年測量の地図にも島路川の両岸の僅かな平地に田圃を示す記号があるから間違いではなさそうである。初秋の風景であろう。

然し私の記憶には「およし茶屋」は既に茶屋を営んではいなかった。「峠のバーチャン」は入口右手奥の竈の前で喜んで迎えてくれた。どの様な会話がありどの様に過ごしたのかも、又この家の周辺の様子も全く記憶が失われている。幼い時の記憶であるから正確ではないだろうが茶屋の前は広い平地があり、その中を抜ける峠の道があり、その道の向うに空地があった。多分、休憩するカチニモチが荷物を置いたり、車馬を止めた名残ではなかったろうか。

この時、既に旧道伊勢道はその役割を終えていた。私達が逢坂峠までこの道を往復した時、車馬は勿論一人とも出会った記憶が無かった。

明治26（1893）年に磯部道（古道）の改修が終わり幅員1間半から2間位の車馬も通れる県道伊勢道（旧道）が開通した。逢坂峠も30m程切り通したため、傾斜が緩やかになり平地が出来た。そこに「庄太郎茶屋（後のおよし茶屋）」がこの頃出来たのだといわれている。

峠越えの人達は行きも帰りもこの茶屋を利用し、名物茶屋として繁盛していた。然し、明治44（1911）年には参宮鉄道（現在のJR参宮線）が鳥羽まで延伸され、勢志をつなぐ大動脈となった。奥志摩の人達は逢坂峠を越えて山田駅から参宮鉄道を利用し、更に大正8（1919）年に鳥羽・鵜方間に、大正10（1921）年には鳥羽・浜島間に乗合バスが運行され、昭和4（1929）年には志摩電気鉄道の鳥羽・賢島間が開通するなどのため、この道路は急速に寂れ道路も荒廃した。幼い私達が登った峠の道はまさにこの荒廃寸前の道であった。新道伊勢道路として蘇るには今しばらく待たなければならないが、この峠の下をトンネルで貫通してしまった。そのため逢坂峠が人の目に入る機会は、全くといっていいほどなくなってしまった。

さてその時、彼女と同居していた男性がいたかどうかの記憶は幼い私には定かではな

い。然しそのような男性がいたことは後日聞いて知っていた。当時の婚姻届は第一子の出産届の直前に出されている事が多い。子供の無かった彼女たちは婚姻届を出す機会が無く、内縁関係のままで終わったと理解していた。古い戸籍を調べているとそういうことが実に多い。戸籍上の婚姻日はあてにならないことが多い。然し、この男性には婚姻できない訳があった。

ところで、「岩崎よし」の老後の面倒を私の父がみることになっていたと亡母から聞いたことがある。当時は余り深くは考えなかったが、父にとって多分身寄りのない叔母さんに当たる人だろうとは漠然と思っていた。我が家を訪れた時の幸せそうな素振りは、頼りとする甥の家にいるという安堵感からであったろうか。幼い私にとっては深い機微は理解できなかった。

然し、ある日突然「峠のバーチャン」こと「岩崎よし」に思わぬ運命の異変が起きた。昭和21（1946）年1月21日「峠のバーチャン」が、老後の頼りとしていた私の父が48才で早世した。父は戦災で家を失い失意の中で、疎開先である自分の母親の出生地一字田で人生を閉じた。仮住まいの病床にあって今は亡き母親を偲んでいたであろうか。私の父のその終末は私たち一家にとって悲しむべきものであった。その父を頼りとした彼女も悲嘆・落胆に暮れたであろう。既に齢は74才であった。空襲で家を焼かれ父を失い、更に敗戦の混乱の中で我が家も大変な状態を余儀なくされた。彼女もそれを痛いほど知っていたに違いない。それ以降、彼女と我が家との交流が途絶えた。母は浜島の鯨望荘の「りょう」さん（父の従妹、よしの姪）に引き取られたといていたから、老後の身寄りについて母を含めて話し合った結果のことであろう。彼女が何時亡くなり、何処に葬られているかも私は知る由もなく現在に至った。

「峠のバーチャン」こと「岩崎よし」についての私の記憶はこれで途切れる。

今回の学習で戸籍の調査や先学の郷土史家の研究論文を拝読し、我が「峠のバーチャン」の生前の実像の一部を知る事が出来た。そして幼い時から抱いてきた私の知識の誤謬や不完全さを知ることも出来た。

参考資料 磯部町史 磯部町史編纂委員会

「峠のバーチャン」への家系を求めて――明治は遠くなりにはけり

「峠のバーチャン」への家系を求めるのに登場する人物は次の通りとなる。当然私の父を出発点とする。

わが父 大屋正二

明治32（1899）年11月12日	的矢に生まれる。父は仲井庄助 母は（谷川）はる。二男・三女の次男。
大正 5（1916）年2月22日	17才で鶴方大屋磯吉・つ祢と養子縁組。
昭和 3（1928）年6月4日	義一戸籍より分家
昭和 3（1928）年8月11日	「おとの（私の母）」と結婚。29歳。
昭和21（1946）年1月20日	母親はるの出生地一字田（谷川益次郎宅）で没。47才10ヶ月。（昭和20年7月の空襲により家屋焼失し疎開中）

我が父方の祖父 仲井庄助

安政 6 (1859) 年 9 月 27 日 恵利原村で岩崎治右衛門の三男とし出生。
明治 11 (1878) 年 8 月 8 日 19 才で迫間の仲井惣兵衛と養子縁組。
明治 16 (1883) 年 3 月 25 日 24 才で家督相続 (惣兵衛の死亡により)。
明治 25 (1892) 年 3 月 28 日 33 歳で (谷川) はると結婚。
明治 36 (1903) 年 6 月 5 日 楠部で没す。56 才。

我が父方の祖母 (旧姓谷川) はる

明治 2 (1869) 年 1 月 23 日 一字田で谷川甚五の二女として生まれる。
明治 25 年 23 歳で庄助と結婚。
大正元 (1912) 年 10 月 16 日 迫間よりの矢へ本籍移転。(仲井常太郎より)
実質居住地の移転は明治 30 年頃か。
大正 8 (1919) 年 4 月 19 日 的矢で没す。50 歳。

よしの兄 岩崎庄太郎 (中村精武氏の著書から)

嘉永 3 (1850) 年 迫間で治右衛門の長男として生まれる。我が祖父庄助の長兄。
明治 20 年頃磯部町山原で水車を始めたが、弟良助に譲り逢坂峠に上って茶屋の創業を企画。
明治 23 年 8 月 迫間から逢坂峠に上って茶屋を創業。逢坂峠に移籍。41 才。
先妻つるは一女を遺して逝く。後妻こさいは明治 33 (1900) 年おりょうを産んで逝く。弟良助の子として入籍。
明治 35 (1902) 年 逢坂山で没。52 才。

本編の主人公 岩崎よし (中村精武氏の著書から)

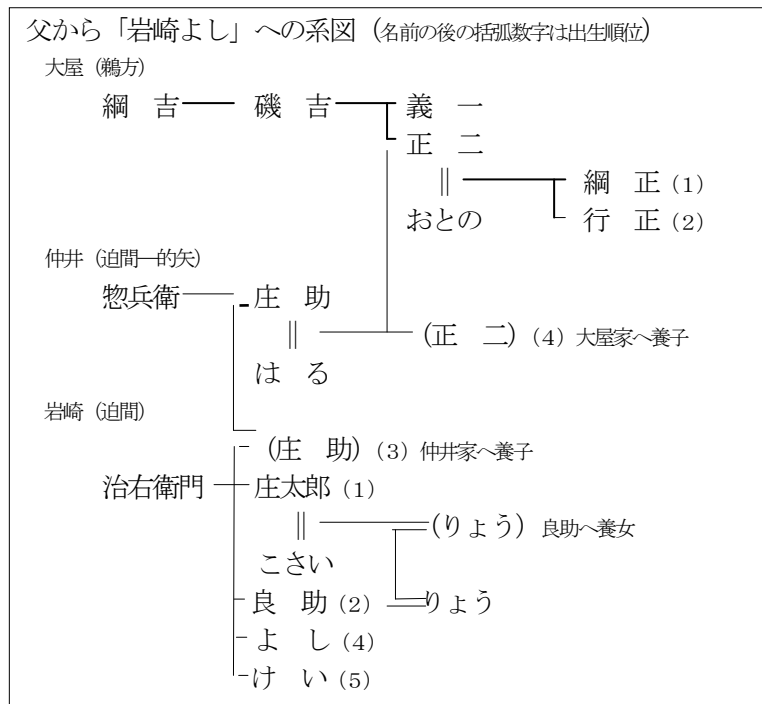
明治 5 (1872) 年 迫間で治右衛門の長女として生まれる。庄太郎・庄助の妹。
沓掛の広野伊三郎 (明治元年～昭和 13 年) と懇ろな間柄となる。
明治 35 (1902) 年 兄庄太郎の死亡により峠茶屋を継ぐ。30 才。
昭和 6 (1931) 年 広野と手を切る。
昭和 14 (1939) 年 6 月 (広野の死の翌年) 浜島の姪りょうの籍から逢坂峠に分家移籍。67 才。
昭和 21 (1946) 年 峠を出て、浜島迫子 (姪の姻戚和田一郎方) に移る。74 歳。
昭和 26 (1951) 年 1 月 21 日 逝く。79 才。迫子呑湖院に葬る。「寒月智芳禅女」。

よしの次兄 岩崎良助 (中村精武氏の著書から)

岩崎治右衛門の次男。庄助の兄。兄庄太郎亡き後岩崎家の家督を相続。「りょう」の養父。
浜島に東明楼を開く。

よしの姪 りょう (中村精武氏の著書から)

明治 33 (1900) 年 庄太郎の後妻「こさい」は「りょう」を産んで逝く。良助



の調べた戸籍では、私の祖父である仲井庄助が治右衛門一族から漏れていることである。何故そうだったかについては、明治以降度重なる戸籍法の改正のなせる技であり、このことについては項を改める。このことが岩崎よしの終末期の動向について、中村氏と私の間で若干の意見の食い違う原因と考えられる。

参考資料 伊勢志摩逢坂峠越覚書 中村精式 上村角兵衛編 志摩郷土会

原戸籍と保存期間

古い戸籍を調べると必ず原戸籍という言葉が出て来る。ここで原戸籍とはどんなものであるのかについて触れておく。我が国の近代的戸籍の変遷は次の通りである。

1. 明治5年式戸籍 明治5～19（1872～1886）年に編製。 壬申戸籍ともいう。

この戸籍は戸数単位に人員を把握した。この戸籍は華土族・平民などの差別的記載があるため、昭和44（1968）年以降公開が認められず、歴史的資料として、各地の法務局で厳重に包装・封印の上保管されている。従ってこの除籍謄本などは取得できなくなっている。

この戸籍は世帯の総人員の氏名が登録され、妾も二等親（配偶者）として搭載された（一夫多婦制婚姻）。然し明治15（1882）年の旧法制定により配偶者としての地位は認められなくなり、一夫一婦制婚姻が採用された。

2. 明治19年式戸籍 明治19～31（1886～1898）年に編製。

本籍の表示が屋敷番から地番を採用（地租との関係）。除籍制度が設けられた。改製による原戸籍（改製される前の戸籍）の保存期間が定められ、また現戸籍は全員が除かれるまで保存される。

本戸籍法の制定により明治5年式戸籍の改製が行われた。然し、地方によっては本戸籍への改製は行わず、のちに明治31年式戸籍に改正したものもある。

3. 明治31年式戸籍 明治31～大正3（1898～1914）年に編製。

民法により「家制度」が制定され、「家」が戸籍の編製単位となる。身分登録簿が設けられる。戸籍の公開制度が採り入れられたが、昭和51（1976）年の改正で戸籍公開に制限が加えられて現在に至っている。その為直系親族以外の戸籍の入手が出来なくなった。

本戸籍法の制定により明治19年式戸籍の改製が行われた。然し、本戸籍への改製を行わず、のちに大正4年式戸籍に改製したものもある。

4. 大正4年式戸籍 大正4～昭和22（1915～1947）年に編製。

明治31年式戸籍が改製されずに引き継がれたもの、またこの旧法（明治31年式）にまだ混在していた明治19年式戸籍も改製されないままのものなど戸籍の改製に乱れがあった。身分登録簿は廃止された。この内、明治19年式戸籍は昭和22（1937）年中に大正4年式戸籍に改製された。明治31年式戸籍は本戸籍に改製することなく、直接昭和23年式戸籍に改製されたものもある。

5. 昭和23年式戸籍 昭和23（1948）年以降に編製。

電子化されていない自治体では現戸籍である。民法の改正により「家制度」が廃止さ

れ、戸籍の編製が一組の夫婦と氏を同じくする子となった。この場合も、前記した混在する多くの旧法戸籍が新法による戸籍とみなされ、新法施行後10年を経過した時改製すべきであるとされ、第一次改製は昭和36(1961)年に、第二次改製は昭和41(1966)年に完了した。この戸籍はこの様に多制度の戸籍が混在したため、原戸籍も複雑になっている。即ち、この戸籍の改製原戸籍は明治19年式、明治31年式、大正4年式となる。

6. 平成6年式戸籍 平成6(1994)年以降に編製。

電子化されている自治体では現戸籍である。戸籍の編集が電子化されたことにより昭和23年式戸籍が改製された。従ってこの場合、昭和23年式戸籍は原戸籍となっている。電子化していない自治体ではこの戸籍は存在しない。

上記の様に我が国の戸籍制度が変遷しているが、新しく生まれた現戸籍の改製前の古くなった戸籍を(改製)原戸籍という。戸籍を調べる場合に必ず出てくるのが原戸籍という言葉である。現戸籍との発音の混同を防ぐため特に「ハラコセキ」と呼んでいる。

戸籍にはそれぞれの編製期間に在籍する人が、その戸籍に入った理由と年月日と従前(この戸籍に入籍される直前)などの戸籍の表示が必ず記載されている。実際に取り寄せた戸籍が現戸籍か除籍か或いは原戸籍か判別できない場合もあるという。

最近のものでは「昭和改製原戸籍」と「平成改製原戸籍」の二種類がある。前者は昭和23(1948)年に制度の変更により、現戸籍になる以前の家単位で構成された古い戸籍をいい、後者は現戸籍の内電子化される以前の手書きの(現)戸籍をいう。未だ電子化されていない自治体では「平成改正原戸籍」は存在しない。

戸籍の保存期間

除 籍 戸籍に記載されている全員が除かれると除籍になる。保存期間は80年。
壬申戸籍 昭和44年に公開凍結。従って明治19年までに作成された戸籍は取得出来ない。

改製原戸籍 明治19年式戸籍が原戸籍となったもの。

保存期間80年(昭和53年、平成7年廃棄)。

明治31年式戸籍が原戸籍となったもの。

但し、直接昭和23年式戸籍に改製されたものを除く。

保存期間80年(平成7年廃棄)。

大正4年式戸籍が原戸籍となったもの。

但し、明治31年式戸籍で直接昭和23年式戸籍に改製されたものを含む。

保存期間80年(昭和の改製が完了した昭和41年より起算すると平成34年廃棄)。

昭和23年式戸籍が原戸籍となったもの。

但し、平成6年式戸籍で電子化された自治体のみ。

保存期間100年。

現 戸 籍 昭和23年式戸籍又は平成6年式戸籍。戸籍の全員が除籍されるまで。

従って現在、確実に取得できる戸籍は明治31年式の一部とそれ以降の分であり、これは祖父母が限度であり、また戸籍公開の制限から傍系尊属である大伯(叔)父母等の

戸籍は取得が難しい。

明治31（1898）年といえば今から110年余り前である。たかが100年されど遠い昔のことともいえる。矢張り明治は遠い昔の世界になってしまったのだ。それ以前の我々のルーツが戸籍上では消えてしまっているからだ。私の人生も約80年、長い年月と言える。

参考資料 旧法（親族／相続／戸籍）の基礎知識 大里知彦 （株）テイハン

何故旧姓岩崎庄助が岩崎家戸籍から漏れたか

さて、我が祖父仲井庄助が中村氏調査の戸籍で何故岩崎家から漏れてしまったのか。岩崎庄助が仲井家に養子縁組したのは明治11年である。明治5年式戸籍の編製期間内で除籍されているため、明治19年式戸籍には既に岩崎家には在籍せずその為記載が引き継がれていなかったことが、前項の戸籍法の変遷から想像される。つまり、明治5年式戸籍が昭和44年に公開凍結され、明治19年までに作成された戸籍は取得出来なくなったからである。戸籍の閲覧が自由に行われた時代においても戸籍法の改製の壁があった。

然し庄助・正二の存在を知ったとしても、中村氏の「岩崎よし」の晩年の不安と動揺についての認識は変わらなかったであろう。何故なら事実私の父が「岩崎よし」の終末に実際に関わることはなかったからである。然し、仲井庄助直系の孫として幼心に聞かされた「岩崎よし」の晩年秘話にわが父「正二」と係わりがあったということを綴っておきたい。

「岩崎よし」の遍歴

明治の女性風俗と「岩崎よし」

中村氏の『伊勢志摩逢坂越寛書』の「およし一代」によると、幼いころから器量がよく愛くるしかった「およし」の若い時に、学問も秀で人品人柄も立派な男性のお世話になったり、さる御隠居のお世話になったりという経歴があったという。「およし」に選ばれた男はそれ以外にもあったらしい。「およし」が選んだ男は「凡そきまった風格があり、人品卑しからず、弁舌さわやかで、他から立てられる男前で田舎紳士」であったと中村氏はいう。然し何れも長続きはしなかった。

「およし」は妻を持つ沓掛の広野伊三郎と深い関係になった。所謂愛妾である。二人の関係は広野の死まで続き彼への思慕は彼の死後も続いた。

現在の社会観では悪女のように思われるだろうが、明治の女性風俗がどのようなものであったか見てみる。

明治の前半では未だ男性中心の封建社会であった。明治5（1872）年に制定された戸籍制度では世帯の総人員の氏名が登録され、妾も二等親（配偶者）として搭載され、明治15年に配偶者としての地位は認められなくなるまで、一夫多婦制婚姻が認められて

いた。明治31（1898）年に現行の一夫一婦制婚姻が採用された。僅か110年前である。

森有礼の『妻妾論』によると、「先ず婚法に二通りあり、媒を用いる婚を夫婦といい、その婦は妻といわれる。媒を用いない婚の相手は妾といわれる。夫妻の婚はその父母の協議や許諾で成立し、夫妻の婚は夫の専決と妾家の承諾で成立し、金を若干妾家に渡し得る」とあり、明治は男が金や力で女を支配できる時代であった。

ではこの時代の士族や豪商の家庭は別として、全人口の80%を占めていたという農漁村の結婚観はどうだったのか。

この頃農漁村には全国的に“若衆宿”・“娘宿”があった。男子は17～8才、女子は15～6才になれば昼の仕事が終わると土地の世話人や長老の家に集って、男達は部落の仕事の打合せや道具の手入れ、女達は糸紡ぎ、織物、縫物などをした。それは一人前になるための伝習所であり、結婚相手を見つける場所でもあった。そしてお互いに知り合うなかとなり、仲間内で公認の関係になるが、自由放任とはいかず若衆宿のリーダーが取り仕切りトラブルを未然に防いでいたという。交通手段も足だけの時代であり、知り合う相手も近隣同士ではば家庭的にも釣り合いの取れた結びつきとなり、親達も相手が出来るとホッとしたという。士族や商家と全く違った風習であった。

男も女も同質の労働力を持つ農漁村では若い男女の労働力は貴重であったから、親達から公認されても簡単に移籍はせず、娘は生家に居り男が通う形を取っていた。子供が生まれると男の家に移るが、終生一緒に暮らすことなくそのうち別れてしまうことも結構多かったという。

農漁村の女達は自分に働きがあるという自信が、結婚とか嫁入るとかの形に縛られない結婚観を育てていた。とはいっても儒教思想の強い時代にあっては女の立場は弱かった。

多分田地田畑を持たない水呑み百姓であったと思われる岩崎家に生まれた「よし」が自分の人生を切り開いて行くには男の庇護に頼らざるを得なかったのではないかと。女ぶりのよい彼女にはその機会に恵まれた。当時としてはそれが必ずしも反社会的な行為とは認識されていなかったのではないと思う。明治とはそういう時代であった。明治31（1898）年までは我国では戸籍法でも一夫多婦制であった。

参考資料 近代女性史 宮城道子 現代書館

本家岩崎家からの分家の謎

明治35（1902）年に峠の茶屋の兄庄太郎が死んだ。「よし」は兄の跡を守ろうと峠に上った。齡30才の時である。広野と話し合った上の愛の逃避行であろう。広野は峠の茶屋の誰憚ることなく常駐亭主の座を射止めた。峠の茶屋での二人きりの生活はその後長く続いた。然しその後「よし」の身の上に幾つかの転機が訪れた。

昭和6（1931）年に最初の転機が起きた。広野が沓掛の区長に推され、区長が管下を離れて情人のもとにあるのは好ましくないと親戚の口がうるさく、彼は我執を捨てて峠を下りた。中村清武氏は手を切ったと記しているが、常勤亭主の座を下りたが非常勤亭主としての立場は捨ててはいなかったと私は推測する。二人が峠に上ってから29年後

のことである。いかに「よし」が気丈であったとしても彼の後ろ盾を失って、ただ一人でその後の峠の一軒家を守ることは出来なかったであろう。

続く転機はそれから6年後の昭和13（1938）年に「よし」は最愛の広野を喪った。「よし」の心の動揺はこの時から始まった。

中村清武氏は「よし」の心境を次のように綴っている。

「およし」には、たとへ別れているにせよ、広野が遠くもない里に現存しているということが心の支えになっていた。世間がどう言おうと、広野は別れた今も自分ひとりのものと信じこんでいた。広野が死んだ。それは老いたつれあいのどちらかが当然受けるべき命運である。いまさら悲しみ嘆き、とりみだす年でもない。そこまでは素直にうけとった。ところが1年もたたずに、本妻がこの世を去った。「およし」としては、本妻が柱と頼む夫に先立たれ、生き甲斐を失って後を慕ったとも、また亡夫が老妻をいとおしんで呼び寄せたとも思われた。「およし」がこう思った時、亡き二人の絆が急に太く強いものであったと思われ、自分の立場が音をたてて崩れ去って行くのを感じた。自分の30年の来し方が自分で嫌でたまらなくなった。そうだ出家遁世のつもりでこの逢坂に骨を埋めよう。そしてあらためて逢坂を終生の地と心に決めた。岩崎家からの分家をしようという心境になったのではないのか

然し、幼い時の私の体験からではあるが、私の推論はやや異なる。

私の父「正二」の新築した家が完成したのは私の記憶では昭和12（1937）年である。此れまでの借家や社宅住まいから一戸の家の主となった。大叔母「よし」が頻繁に我が家を訪れるようになったのは実はこの頃からであると記憶している（私の記憶が確かになってきたからかもしれないが）。又、私が峠の「およし茶屋」を目指して磯部道を登ったのもこの頃からである。大叔母「よし」の最愛の人広野が永眠した直後といえる。

先行き短い老女が出家遁世の心境となり、誰に看取られる事もなく、一人この逢坂峠命を終わろうという覚悟が出来るものか私にはよく理解できない。矢張り誰かに頼りたいと思うのが自然ではないだろうか。大叔母「よし」は私の父に救いを求めた。

私の父は面倒見のよいこまめな人柄であった。最も頼みとした人を喪い意気消沈している叔母の終末の面倒をみるという救いの手を差し伸べても不自然ではないだろうと思う。広野が死去した翌年突然逢坂峠へ分家移籍したのは、晩年は浜島ではなく伊勢で終わるという彼女の強い意思表示でありその準備だと思う。そう決断するのに約1年がかかった。「おりょう」は浜島の鯨望荘の立ち上げに懸命になっていた時である。甥である私の父「正二」と姪の浜島の「おりょう」とで話し合った結果であろう。67歳の大叔母「よし」は天外孤独から救われホットしたに違いない。

『磯辺町史』によると明治の初期大叔母「よし」の幼少期には、磯部では女子が就学するのは稀であったことから大叔母「よし」も終生文字には暗く、分家移籍の手続きも一人ではなし得なかったであろう。父「正二」は献身的に関わったと思う。これは今では確かめる手立てのない私の独断ではある。

では何故すぐ峠を下りなかったのか。67歳を迎え老後の保障を得た歴戦練磨の大叔母「よし」はまだまだ元気であった。中村清武氏によると戦時中（太平洋戦争）はこの付近に兵隊が駐屯しており、大叔母「よし」は頼まれて食事の世話をしていた。茶屋としての機能は失っていたが、まだまだ出番があったということである。敗色濃厚となった戦争末期の昭和19（1944）年頃になると、伊勢地区にもしばしば米軍機が飛来し爆弾の

お土産を落して行ったり、上空では空中戦が繰り広げられるようになった。我が家でも空襲対策が始まった。大叔母「よし」を迎えるには危険を伴い下山の時期も伸び伸びとなった。そして昭和20（1945）年の空襲による我が家の焼失、翌年の昭和21（1946）年、頼みの父の死亡により遂に我が家への下山は実現しなかった。これが後で記す三度目の転機の始まりである。

逢坂峠「およし茶屋」も伊勢から志摩方面への交通の近代化により、昭和の初期から徐々に影響を受けた。志摩電気鉄道（現在の近鉄志摩線）が昭和4（1929）年に鳥羽・賢島間が開通した。金を惜しまず「楽に速く」を求める旅人は逢坂越えを避け鉄道を利用するようになった。昭和の10年代にはまだ馬車や人力の大八車による運搬稼業が残っていたから、恐らく峠越えも細々と続いていただろうから、大叔母「よし」の茶屋収入は何がしかあったと思うが、生計の維持は大変であったろうし、女一人で茶屋の仕入れなどどうしていたのか、残念ながら幼い私には知る由もなかった。子のない彼女を甥や姪がどの様な援助をしていたのか最早確かめる術はない。

参考資料 伊勢志摩逢坂峠越覚書 中村清次 志摩郷土会

「岩崎よし」 浜島・迫子へ下山

大叔母「よし」の三度目の転機は老後を託した我が父「正二」の早世である。

『伊勢志摩逢坂峠越覚書』にその転機について次のような紹介の一文がある。

昭和21（1946）年、「およし」は75才になった。その年、峠の家を捨てて迫子に移った。姪の姻戚和田一郎氏を頼って来たのである。和田氏は伊勢への途次、よく峠の茶屋に憩んで前から顔見知りであった。「およし」は一時は逢坂を終生の地と心に決めたものの、戦中戦後の世情は世を捨てた老婆の安閑生きていけるような生易しいものではなかった。およしが身の行く末を案じているのを、和田氏は見かねて、引き取った。迫子に移ってから、「およし」は年では老醜というに近かったが、見にしみたあだっぽさがほんのりと残り、“残艶”という風情をただよわせていた。さすがに耳は遠くなっていた。迫子に来て6年、20日ほどの臥床のすえ、昭和26（1951）年波瀾の多い一生を閉じた。呑湖院に「寒月智芳禅女 行年七十九才」の墓石の下に眠っている。

「およし」を知っている人は少なくないが、その誰もが、美しい顔立ちで気立てのよい人であったと話した。思い越して顔をしかめる人は一人もなかった。その質も名と相通じたのである。「およし」のような型の女は、もう志摩からは出ないであろう。しょせん明治の女であった。

私は大叔母「よし」が浜島で没したことは聞いていた。この一文で「よし」の晩年について知ることが出来た。然し私の幼い頃の情報を頼りに若干書き込みをして置きたい。但しこれは私の推測であり、最早これを確かめる手立てはない。

昭和21（1946）年は私の父「正二」の亡くなった年である。自分の人生の終末を託した甥「正二」の死が「よし」の心に与えたであろう衝撃はたとえようもなく深刻なものであり、心の動揺は我々の想像を絶するものがあったと思う。まさにお先真つ暗とはこのことであろう。「よし」は決して逢坂を終生の地と心に決めこの地で独り果てるつもりは無かったと思う。我が父「正二」へのすぎる願いが由無いものと消え去った。

伊勢船江への下山の夢が潰えた今、浜島の「おりょう」に頼るのが本来の姿であろうが、籍を抜き分家した経緯や鯨望荘の立ち上げの時期とも重なり無理もいえず、途方に暮れる「よし」に救いの手を延べたのが和田一郎氏である。「おりょう」の夫の縁者ではないかと推測する。彼を頼り迫子に下山した。「よし」は天涯孤独の生涯をただ独り寂しくこの逢坂峠の山中で閉じなければならぬという悲運を避けられた。5年間幸せの終末期を送った。昭和26（1951）年1月21日波乱の一生を閉じた。その日は我が父「正二」の命日と1日違い（丁度6年後）である。迫子の呑湖院に「寒月智芳禅女 行年79歳」と彫られた墓石があるという。いずれかの機会に訪れてみたい。

参考資料 伊勢志摩逢坂峠越覚書 中村清武 志摩郷土会

「岩崎よし」を偲ぶ逸話二題

最後に地元の有力者達の大叔母「よし」を偲んで綴られた一文を書き留める。

1. 鍋島梅太郎氏 （郷土志摩42 志摩郷土会）

しばらく行くと峠の茶屋。休もうか、カチニモチのおじさんたちも休んでいるが、茶屋代がいるから失礼。

2. 谷 広氏 （郷土志摩42 志摩郷土会）

・私の父親は釣が好きで、ある日逢坂へハエ（鮒 ハヤ 淡水魚のウグイ・オイカワ・モツゴなど）釣に出かけた。なかなかよく釣れるので、何時の間にやら峠の向う側まで行ってしまった。極度の空腹のため、急性飢餓に襲われた。這う様にしてやっと峠に辿りついた。其の頃そこに、「およし」という磯部町沓掛の人が茶店を営んでいたそうであるが、懇願して一飯恵んでもらい、危急をのがれることが出来た。あいにく一銭の持ち合わせもなかったので、訳を話して辞去し、翌日お金を持参してねんごろに礼を述べたという。

・私も釣りの大マニアで、この逢坂道は釣の方ではなかなかゆかりが深い。青年の頃夏休みに毎年一回は鰻つりのため、逢坂峠の下まで遠征を試みた。峠を境に磯部川は、道も川も何度となく歩いた。街道の道筋に板坂、日向郷、新茶屋など、いくつかの茶屋があった。ひっそりとした土間続きの「およし茶屋」の縁側に腰を下ろして、一個一銭か二銭の駄菓子を食べた。

あとがき

前編の『逢坂峠越磯部道あれこれ（1）』に引き続き本編を起稿したのは平成21年4月である。約2年を経ている余りにも長すぎるので何か事情があったのか考えたがこれという理由はない。然し強いて理由を挙げれば次の3点がある。

1. 前編は3月に脱稿したあと、記述に就いて志摩市立磯部郷土資料館のご指導を受けた。その際同資料館の学芸員崎川由美子女史の御取り計らいで、志摩市文化財調査委員の助田時夫氏の懇切なご指導を頂き現地にも出向き有益なご助力を頂くことも出来、

私の疑問点を書き改めることが出来たことは最大の成果であった。8月に完成した。

2. 逢坂峠を中心に日本神話を思わせる地名や旧蹟が纏まって存在することから、日本神話に拘り、私の手には負えない深みに入りこんでしまった。書籍を探しNETWEBをあさり行きつ戻りつを繰り返した。今なお自信は無い。

3. 持病のメニエル症によると思われるめまいが1カ月位続いた。主治医から入院して点滴を続けるように勧められ、昨年4月に4日間の点滴三昧の生活を送った。

その他、複雑な戸籍法の学習に梃子摺った。戸籍法の壁と同時に、祖先のルーツを探るにも限界があることも分かった。

「岩崎よし」の終末の地である浜島・迫子を訪れてどの様なところか、「よし」の終末の様子を知りたいと思ったが知る人も無かろうと勝手に決めて割愛した。今後、機会があれば是非訪れて見たいとは思っている。

尚、父「正二」の忌日（没後65年）は1月20日、大叔母「よし」の忌日（没後60年）は翌日の21日であり、この忌日に合せて本項を脱稿出来たことは幸いである。

前編同様に先学の皆様からのご意見・ご指導を頂けることを願って擱筆する。

以 上